

# 多賀城市内の遺跡 1

—平成15年度発掘調査報告書—

平成17年3月

多賀城市教育委員会



## 序 文

多賀城市は、古来より多くの人々が生活を営み、文化を育み、その証として数多くの有形・無形の文化財が残されています。特に、奈良・平安時代には、古代国家の地方行政の中核機能を持つ「陸奥国府・多賀城」がおかれるなど、行政・文化・経済・交通の要衝の地として栄えたところであります。

今日でもその要衝の地としての位置づけは変わらず、地方拠点都市として大いに繁栄しているところではありますが、市内には多くの文化財が埋蔵されているため、急激な開発の波により、多くの埋蔵文化財が失われていることも事実として認識しなければなりません。

本書は、平成15年度に実施した市単独事業：八幡館跡ほか6遺跡、受託事業：新田遺跡の発掘調査成果を収録しています。いずれも調査面積は小規模なものですが、多賀市の歴史を解明するうえで貴重な資料を提供しました。

この報告書が、市民を始めとして広く活用され、埋蔵文化財に対する関心とご理解を深めていただく一助となれば幸いです。

最後になりましたが、発掘調査に際しまして、ご理解とご協力をいただきました地権者を始め、関係各位に対し、心より感謝申し上げます。

平成17年3月

多賀城市教育委員会  
教育長 菊 地 昭 吾



## 例　　言

1. 本書は、平成15年度の市単独事業で実施した14件と受託事業1件の調査成果をまとめたものである。
2. 遺構の名称は第1次調査からの連番号である。
3. 測量法の改正により、平成14年4月1日から経緯度の基準は、日本測地系に代わり世界測地系に従うこととなったが、本書中の各調査区で使用した座標値は、過去の調査区との整合性を図るため、従来の国土地標「平面直角座標系X」を用いている。なお、市川橋遺跡の調査区基準線については、X=−189,200.000、Y=13,850.000（南北・東西大路交差点の中央付近）の交点を東西・南北の原点とし、1m離れるごとに、東西方向は東にE 1・E 2・・・、西にW 1・W 2・・・、南北方向は北にN 1・N 2・・・、南にS 1・S 2・・・と表示している。
4. 採団中の高さは標高値を示している。
5. 土色は『新版標準土色帖』（小山・竹原：1996）を使用した。
6. 本書の執筆は、調査員全員の協議のもとに、I・IVを村松 稔、IIを相澤清利、III・V・XVを島田 敏、VI・VII・XI・XIII・XVを武田健市、VII・IX・X・XIIを石川後英が担当した。また、編集は相澤清利がこれにあたった。
7. 市川橋遺跡第43次調査の報告に際し、藤澤 敦氏（東北大学埋蔵文化財調査研究センター）からご教示を賜った。
8. 調査に関する諸記録および出土遺物はすべて多賀城市教育委員会が保管している。

## 目　　次

I. 遺跡の地理的・歴史的環境	1	IX. 市川橋遺跡第41次調査	30
II. 八幡館跡第1次調査	5	X. 市川橋遺跡第43次調査	34
III. 八幡館跡第2次調査	13	XI. 山王遺跡第41次調査	48
IV. 西原遺跡第2次調査	18	XII. 山王遺跡第42次調査	57
V. 西沢遺跡第11次調査	20	XIII. 山王遺跡第43次調査	61
VI. 高崎遺跡第41次調査	24	XIV. 山王遺跡第44次調査	70
VII. 市川橋遺跡第39次調査	26	XV. 新田遺跡第25・26次調査	77
VIII. 市川橋遺跡第40次調査	27		

## 調査要項

1. 調査主体 多賀城市教育委員会 教育長 櫻井 茂男（～平成16年9月） 教育長 菊地 昭吾（平成16年10月～）
2. 調査担当 多賀城市埋蔵文化財調査センター 所長 高倉 敏明（～平成16年3月） 所長 佐藤 康輝（平成16年4月～）
3. 調査協力者 小野義一・及川 洋・郷古信治 浜田 博・狩野恒雄・郷古久造・松尾 靖 加藤文一・芳賀省二・堅田重義・猪俣和宏 尾形多喜男・尾形由美・大江昭一 緑川 聰
4. 調査従事者 赤間かつ子 浅野喜久男 浅野 忠 芦野しづ子 遠藤 実 大友良子 大山貞子 小野玉乃 小野寺恵子 小幡 武 小松まり 今野和子 後藤恵子 塩井一征 鈴木太仲 鈴木寿二 武山あや子 田中裕子 南城美咲子 平山節子 藤澤拓司 藤田恵子 宮川ハルミ 宮下喜代平 山下裕子 渡辺ひで子 渡辺幹子 渡辺ゆき子 岡本典子
5. 整理従事者 伊藤美恵子 内海由美子 浦風志恵子 遠藤友美 小野寺雪子 鹿野智子 熊谷純子 今野妙子 坂本英美 中村千恵子 横山佳織 村上和恵 渡邊奈緒 小川菜々子

## 凡　　例

本書中で使用する遺構略称、遺物分類については、以下のとおりである。

### 1. 遺構略称

S I : 竪穴住居 S B : 建物 S A : 柱列 S D : 溝 S K : 土壙 Pit(P) : 柱穴及び小穴  
S X : 道路、河川及び性格不明な遺構

### 2. 遺物分類（奈良・平安時代）

#### 1) 土師器杯

A類：ロクロ調整を行わないもの  
B類：ロクロ調整を行ったもの

B I類：ロクロからの切り離し後、回転ヘラケズリされたもの

B II類：ロクロからの切り離し後、手持ちヘラケズリされたもの

B III類：ロクロからの切り離しがヘラ切りで、再調整されないもの

B IV類：ロクロからの切り離しが静止糸切りで、再調整されないもの

B V類：ロクロからの切り離しが回転糸切りで、再調整されないもの

B I・B II類では、ロクロからの切り離しが識別できる資料があり、ヘラ切りによるものをa、静止糸切りによるものをb、回転糸切り（糸切り）によるものをcとして細分する

#### 2) 土師器甕

A類：ロクロ調整を行わないもの  
B類：ロクロ調整を行ったもの

#### 3) 須恵器杯

I類：ロクロからの切り離し後、回転ヘラケズリされたもの  
II類：ロクロからの切り離し後、手持ちヘラケズリされたもの  
III類：ロクロからの切り離しがヘラ切りで、再調整されないもの  
IV類：ロクロからの切り離しが静止糸切りで、再調整されないもの  
V類：ロクロからの切り離しが回転糸切りで、再調整されないもの

I・II類では、ロクロからの切り離しが識別できる資料があり、ヘラ切りによるものをa、静止糸切りによるものをb、回転糸切り（糸切り）によるものをcとして細分する。

#### 4) 瓦の分類

「多賀城跡 政府跡 図録編」（宮城県多賀城跡調査研究所 1980）、「多賀城跡 政府跡 本文編」（宮城県多賀城跡調査研究所 1982）の分類基準に従った。

3. 本文中で記載する「灰白色火山灰」については、その起源を宮城県北西部に求める説（山田・庄子：1980）と十和田a火山灰と同一とする説（町田ほか：1981、阿子島・壇原：1991）があるが、近年は後者の説が有力である。この火山灰の降下年代については、年輪年代測定で907年とされた秋田県払田柵跡外郭線C期角材列存続期間中に降灰し、承平4年（934）閏正月15日に焼失した陸奥国分寺七重塔の焼土層に覆われていることから、907～934年の間と考える立場（多賀城跡調査研究所：1998）と、『扶桑略記』延喜15年（915）7月13日にある「出羽国言上雨灰高二寸諸郷桑枯損之由」の記事に結びつけ、915年とする説（町田ほか：1981、阿子島・壇原：1991）があるが、本書では考古学的な見解を重視し前者に従った。

# I. 遺跡の地理的・歴史的環境

## 1. 八幡館跡

本遺跡は、多賀城市南部の国道45号線と砂押川に挟まれた八幡地区に所在し、東西約300m×南北約200mの広さを有する。遺跡が立地する低丘陵（標高10～13m）は、松島丘陵から塙竈方面に派生した平坦な低丘陵の最南端に位置する。北側には砂押川が東流し、南側は仙台平野、太平洋を望む。周囲は宅地化が著しく、館跡のある丘陵もかなり地形が改変されている。

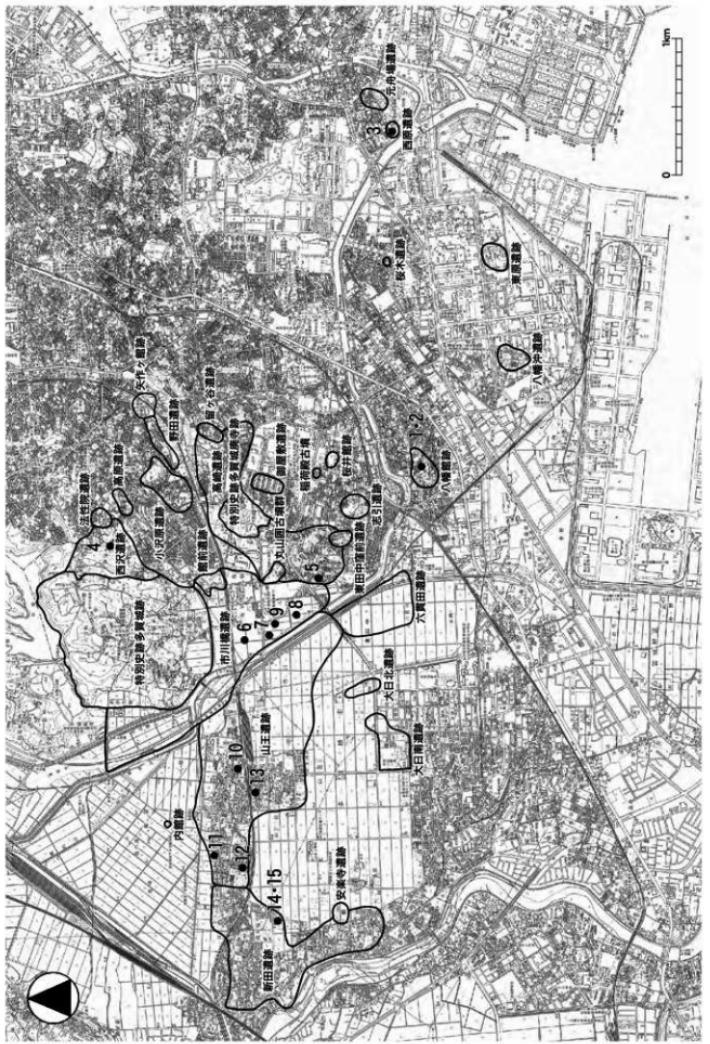
本遺跡については、古代～中世の時期として登録されており、丘陵の一隅には歌枕で知られる「末の松山」、近くには「沖の井（石）」がある。末の松山浄水場の周辺は、50m×60mほどの平坦な台地状を呈し、地域住民からは「本丸」と呼ばれている。この「本丸」の西南部に土取りで残された残丘があるが、ここは館の南端部と見られており、曲輪の一部や、土壘状の高まりも現存する。「本丸」の東方にある「末の松山」の丘も「古館」と言われているが、墓地と化しており、館跡としての形態をたどることはできない。一方、文献によると八幡館の城主は、『仙台領古城書立之覧』『八幡村風土記御用書出』に伊沢四郎家景家臣「八幡兵庫」と記されている。八幡氏は戦国時代には留守氏の家臣となっているが、天正18年（1590年）に留守政景が黒川郡大谷（大郷町）に所替えになると、八幡氏もこれに従い移転するので、この頃に八幡館は廃止されたとみられている。

## 2. 西原遺跡

本遺跡は、大代一丁目に所在し、東西、南北ともに約130mの広さを有する。多賀城市を北西から南東に向かって流れる砂押川左岸に立地しており、地形的には海岸線に沿って形成された浜堤列の間に挟まれた後背湿地にある。

本遺跡については、1973年に宮城県文化財保護課の分布調査の際に少量の土師器が散布していることが確認され、奈良～平安時代の遺跡として登録された。その後、遺跡の南側において仙台港多賀城地区緩衝緑地を建設する際に盛土造成がおこなわれ、このときに本遺跡を含む一帯は地下に埋没したと思われる。緩衝緑地は1976年に完成し、1979年に本市教育委員会による分布調査がおこなわれたが、遺物は採集できず遺跡の範囲も確認できなかった。2002年に確認調査として第1次調査が行われたが、調査範囲も狭く遺構や遺物は発見できなかった。

本遺跡が所在する多賀城市的沿岸地域には、縄文時代から遺跡が多く存在している。弥生時代では、山内清男によって「石器時代にも瘤あり」と報告された樹形圓貝塚があり、弥生時代中期土器の標識遺跡として著名である。また、古墳時代から奈良時代には、頭椎大刀が出土した大代横穴墓群があり、その被葬者は中央政権と結びついた氏族が想定される。奈良時代には陸奥国府多賀城直営の製鉄所と考えられる柏木遺跡がある。本遺跡の東側に隣接する元舟場遺跡では、中世の溝跡を発見しており、近世になると水上交通網の整備を目的として御船入堀（貞山堀）が開削される。このように沿岸地域一帯には各時代にわたって多くの遺跡を確認していることから、これらを形成した集落跡の存在が想定されるが、その様相はほとんどわかつていない。



第1図 調査地の位置

### 3. 西沢遺跡

本遺跡は、多賀城市市川及び浮島地区に所在し、東西約450m、南北約700mの広さを有する。低丘陵の南斜面に立地し、標高は6～46mを計る。全体としては、大小の沢が入り込み、起伏に富んだ景観を呈している。周辺をみると、西側には特別史跡多賀城跡が隣接し、東側には奈良・平安時代の散布地及び集落跡である法性院遺跡と高原遺跡が所在する。

本遺跡については、これまで10次にわたる発掘調査が実施されており、古代と中世を中心とする多数の遺構・遺物が発見されている。中でも平安時代の鍛冶工房跡を含む堅穴住居跡や掘立柱建物跡の存在は、隣接する多賀城跡との関連をうかがわせるものである。

### 4. 高崎遺跡

本遺跡は、市の東半部を占める標高30m以下の低丘陵西端部に位置し、東西約1.2km、南北約1kmの広さを有する。この丘陵は、塩竈方面から本市北東部に至り、南側及び西側の沖積地に向かって枝状に派生している。このため、大小の谷が複雑に入り組んだ、起伏に富んだ地形を呈している。

No	遺跡名	所在地	調査期間	調査面積	調査員
1	八幡館跡第1次	八幡二丁目384-1	平成15年5月29日～6月9日	20m <sup>2</sup>	相澤清利
2	八幡館跡第2次	八幡二丁目341-1	平成15年7月31日～8月22日	120m <sup>2</sup>	島田 敏
3	西原遺跡第2次	大代一丁目127-5	平成15年8月4日～6日	8.5m <sup>2</sup>	村松 稔
4	西沢遺跡第11次	浮島字西沢53-3	平成15年7月23日～8月5日	10m <sup>2</sup>	島田
5	高崎遺跡第41次	高崎二丁目102-2	平成15年4月16日～18日	11.5m <sup>2</sup>	武田健市・相澤正信
6	市川橋遺跡第39次	市川字鴻ノ池地内	平成15年8月1日～8月6日	40m <sup>2</sup>	武田・相澤(正)
7	市川橋遺跡第40次	市川字鴻ノ池地内	平成15年9月9日～11日	25m <sup>2</sup>	石川俊英・島田
8	市川橋遺跡第41次	市川字鴻ノ池地内	平成15年11月12日～28日	45m <sup>2</sup>	石川
9	市川橋遺跡第43次	市川字鴻ノ池76・77	平成15年12月5日～17日	45m <sup>2</sup>	石川・島田・相澤(正)
10	山王遺跡第41次	山王字東町浦80-8	平成15年5月19日～6月3日	33m <sup>2</sup>	石川・武田
11	山王遺跡第42次	南宮字町93	平成15年8月25日～9月12日	55m <sup>2</sup>	石川・菊池 豊
12	山王遺跡第43次	山王字西町浦42-7	平成15年10月6日～24日	40m <sup>2</sup>	武田
13	山王遺跡第44次	山王字中山王1-6	平成15年10月9日～31日	20m <sup>2</sup>	島田
14	新田遺跡第25次	新田字北31-1	平成15年8月18日～9月24日	57m <sup>2</sup>	武田
15	新田遺跡第26次	新田字北31-1	平成15年8月21日～9月24日	90m <sup>2</sup>	武田

第1表 発掘調査一覧表

本遺跡については、これまで多くの調査が実施されており、古墳時代から近世の遺構が発見されている。このうち特に注目されるのが、奈良・平安時代の遺構である。多賀城廃寺跡の南西200mに位置する弥勒地区では、掘立柱建物跡や竪穴住居跡が多数発見されており、出土した遺物から多賀城跡や多賀城廃寺跡との関連が指摘されている。また、井戸尻地区では1,000個体を超す多量の灯明皿が一括廃棄されており、周辺で万燈会などの仏教儀式が行われていたことを推測させる。

## 5. 市川橋遺跡

本遺跡は、市中央部を北西から南東方向に貫流する砂押川東岸に形成された、標高2～3mの微高地上に立地し、東西約1.4km、南北約1.6kmの広さを有する。北東側に接する低丘陵上には、奈良・平安時代を通して陸奥国府が置かれた特別史跡多賀城跡があり、これと密接に関係する古代の遺跡として知られている。

本遺跡については、これまで多くの調査が実施され貴重な成果を得ているが、特に注目されるのが多賀城南面に施工された古代の方格地割りの発見である。これは、城外の二大幹線道路である南北大路と東西大路を基準とする南北・東西の道路によっておおよそ1町四方に区画されたものであり、その範囲は西側に隣接する山王遺跡にまで及んでいる。本遺跡中央部はこの幹線道路の交差点にあたり、周辺では規則的に配置された大規模な建物群や四面庇付建物が発見されるなど、城外でも最も重要な地域であると考えられる。

## 6. 山王遺跡

本遺跡は、市西部を北西から南東方向に貫流する七北田川と砂押川に挟まれた、標高3～4mの微高地上に立地し、東西約2km、南北約1kmの広さを有する。同じ微高地上には、西側に隣接して新田遺跡、砂押川を隔てた東側に市川橋遺跡が所在しており、大規模な遺跡群を形成している。

本遺跡については、これまで多くの調査が行われており、弥生時代中期頃の水田跡や古墳時代中期～後期の集落跡、古代の方格地割りなどが発見されている。このうち、古代の方格地割りは市川橋遺跡のものと一連であり、幹線道路である東西大路が遺跡中央付近を横断している。また、近年の成果では、東西大路沿いには国司クラスの邸宅が形成されるに対し、大路より一区画離れた場所には下級役人の住まいが設けられるなど、地割り内での階級による土地の選定が行われていたことも判明している。

## 7. 新田遺跡

本遺跡は、市西部を北西から南東方向に貫流する七北田川東岸に形成された、標高5～6mの微高地上に立地し、東西約0.8km、南北約1.6kmの広さを有する。繩文時代から中世にかけての遺跡として知られているが、特に中世では、溝で区画された屋敷跡が多数発見されている。このうち、遺跡東部にあたる寿福寺地区では、12世紀後半から16世紀にかけて連続して屋敷群が形成されていたことが明らかとなり、出土遺物から上級武士の屋敷と考えられている。西側に隣接する仙台市宮城野区岩切から本遺跡一帯は、留守氏が支配する「高用名」及び「南宮庄」に含まれる地域であることから、これら武士層は留守氏と深く関係のあるものと想定される。

## II. 八幡館跡第1次調査

### 1. 調査に至る経緯と経過

本調査は、個人住宅建設工事に伴うものである。住宅の基礎工事にあたっては、現地表下約1.3mまで表層改良を行う計画であることから、地下遺構への影響が懸念された。しかしながら、これまで本遺跡において発掘調査が実施されておらず、遺跡の実態が不明であった。このため、まず確認調査を実施し、この成果をもとに申請者と協議を行うことになった。平成15年5月19日付で発掘調査の依頼があり、5月29日から開始した。

調査は、はじめに重機を使用して表土及び現代の盛土を除去した。終了後、西側より遺構検出作業を開始し、Ⅲ層上面で溝、土壙、ピット等のプランを検出したことから、遺構の存在が明確となった。この検出面までの深さが約1mであったことから、工事にあたって遺構を損傷する可能性が生じた。このため、再度申請者と協議を行ったが、申請どおりの工法で実施することに決定した。これを受けて本発掘調査に切り替え調査を続行した(5/30)。遺構の掘り込みは、SK01・04土壙、SD02溝跡、ピット群を先行し、隨時平面図・断面図の作成、写真撮影を行った。6月4日からは、SD03B溝跡、豎穴状プランの調査に入る。SD03B溝跡は、SD03A溝跡を埋め戻して構築されていることが判明し、豎穴状プランは、部分的な検出ではあったが貼床、周溝の存在から豎穴住居跡と判断した。6月9日には、全景写真撮影、器材の撤収、翌10日に埋め戻しを行いすべての調査を終了した。

### 2. 調査成果

#### (1) 基本層序

調査区内の基本層序は以下のとおりに分層された。

Ia～b層：現代の表土および盛土を一括した。層厚は0.5m～1m。

II層：褐灰色シルト(10YR5/1)の旧表土層(中世以降)。層厚は0.1m～0.5m。

III層：明赤褐色シルト(2.5YR5/6)の基盤層(地山)。古代・中世の遺構検出面。

#### (2) 発見遺構と遺物

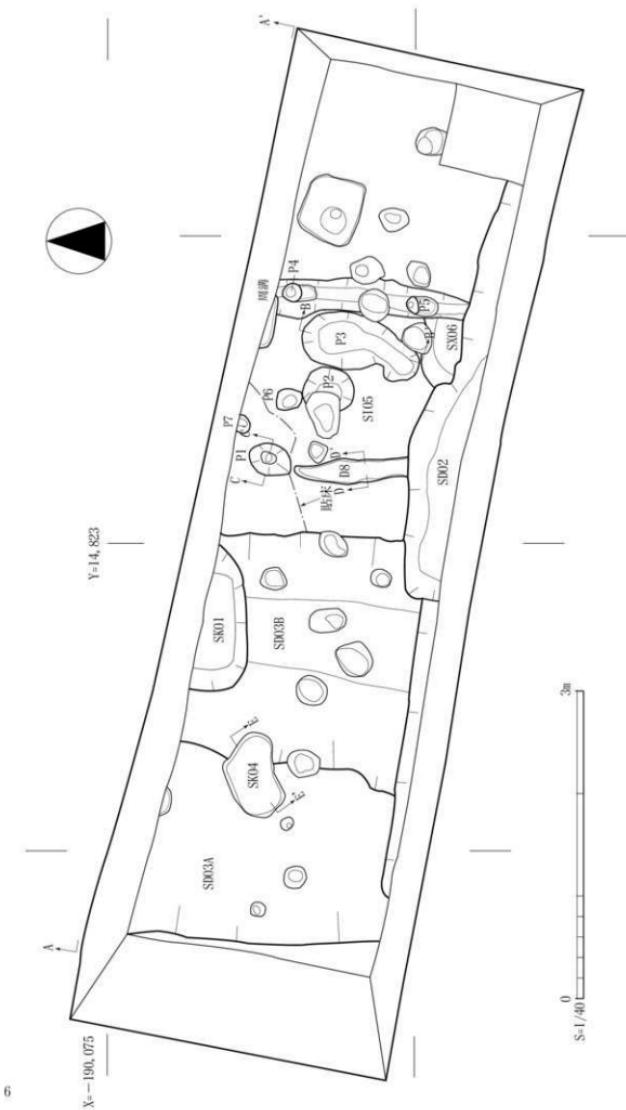
##### S105豎穴住居跡

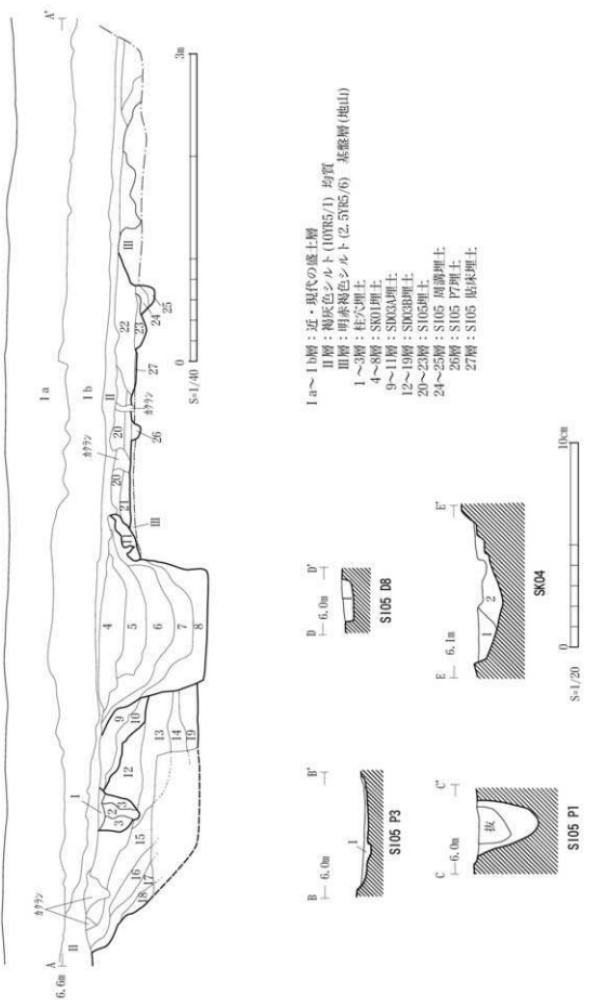
調査区のやや東より、第Ⅲ層上面で発見した。SD02・03溝跡と重複し、それらよりも古い。住居は周溝、壁柱穴、主柱穴、貼床の一部を検出したにすぎない。方向は、周溝の方向で見ると、ほぼ発掘基準線



第1図 調査区位置図

第2圖 遺構平面圖





第3図 調査区北壁他断面図

に一致する。規模は東西約2.5m以上、南北2.1m以上を計る。残存壁高は約0.2mを計るが、立ち上がりは外傾する部分もある。周溝は東壁沿いに検出され、幅15~40cm、深さ20cm、断面形はU字状を呈する。柱穴は主柱穴が1基（P1）、壁柱穴（P4・5）が2基確認され、いずれも柱が抜き取られていた。東壁際で検出したP3は、不整圓丸方形を呈し、長軸1.2m、短軸0.5m、深さ0.5mを計る。その他、床面上で小ピット3基（P2・6・7）、南北方向の小溝跡（D8）1条が検出された。埋土は3層に分けられ、灰褐色シルト（10YR4/2~2/5）とくびい黄褐色シルト（10YR5/3）からなる自然堆積土である。遺物は、埋土より土師器杯（B V類）・甕（A・B類）、須恵器杯（I類）・甕が、周溝埋土より土師器杯（B類）・甕（B類）、須恵器甕の破片が若干出土した。P3埋土からは、土師器杯（B V類）・甕（A・B類）、須恵器杯（III類）、紡錘車（第4図10）が出土した。

#### S D02溝跡

調査区南壁際のⅢ層上面で発見した東西方向の溝跡である。S D03溝跡、S I 05豎穴住居跡と重複し、それよりも新しい。北壁の立ち上がりと一部底面を確認したのみである。確認できた長さは約2mで、深さ0.2mを計る。方向は北で約80度西に偏している。底面は凹凸があり、壁は緩やかに立ち上がる。埋土は2層に分けられるが、いずれも黒褐色粘土（2.5Y3/2）で、下層にII層ブロックが多く混じる。遺物は、無釉陶器甕の破片1点のほか、土師器杯・甕の破片が若干出土した。

#### S D03溝跡

調査区西半のⅢ層上面で発見した南北方向の溝跡で、新旧2時期の変遷を確認した。S I 05豎穴住居跡、S D02溝跡、S K01と重複し、S D02溝跡、S K01より古く、S I 05豎穴住居跡よりも新しい。

**S D03A溝跡：**確認できた長さは約2.4mで、幅約4.3m、深さ約1mを計る。方向は、ほぼ座標北に沿う。断面形は逆台形を呈し、底面はほぼ平坦である。埋土は8層に分けられ、17~19層がくびい黄色シルト（2.5Y6/3）の自然堆積土、12~16層が明黄褐色シルト（10YR6/6）で、多量にブロック状の土塊を含むことから人為的埋め戻し土である。遺物は、土師器杯・甕、須恵器・長頸瓶の破片が若干出土した。

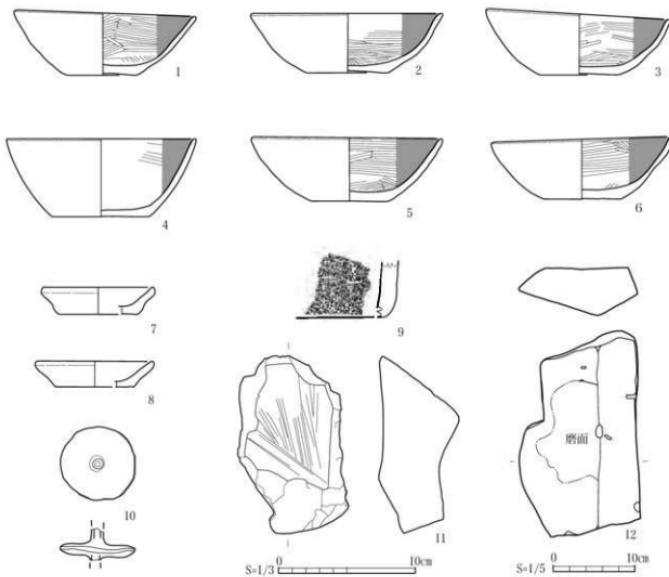
**S D03B溝跡：**確認できた長さは約2.2mで、幅約2.5m、深さ約0.5mを計る。方向は、東壁ラインでみるとほぼ発掘基準線に一致する。底面は丸底気味で、壁は緩やかに内湾しながら立ち上がる。埋土は3層に分けられ（9~11層）、黄灰色シルト（2.5Y4/1）と炭化物を縞状に含む土を主体とする自然堆積土である。遺物は、かわらけ片2点（第4図7・8）、土師器杯・甕、須恵器甕の破片、砥石2点（第4図11・12）のほか、焼けたスサ入り粘土・焼けた粘土片が若干出土した。

#### S K01土壤

調査区ほぼ中央、北壁際のS D02溝跡埋土上面で発見した。S D03溝跡と重複し、それよりも新しい。平面形は東西1.55m以上、南北5.0m以上の圓丸方形を呈し、深さは1.05mを計る。断面形は逆台形状で、壁上端は開き気味となる。埋土は5層に分けられ、いずれも自然堆積である。黒褐色シルト（10YR3/1）を主体とし、全ての層に炭化物が顕著に包含されていた。遺物は、かわらけ、須恵器、焼けたスサ入り粘土の破片が若干出土した。

#### S K04土壤

調査区西寄りのS D03溝跡埋土上面で発見した。S D03溝跡と重複し、それよりも新しい。平面形は不整形をなし、規模は、長軸0.8m、短軸0.45m、深さ0.12mを計る。底面はやや凹凸があり、壁は内湾気味に立ち上がる。埋土は2層に分けられるが、いずれも褐灰色シルト（10YR4/1~5/1）と近似する。遺物



番号	種類	遺跡・層位	特徴		口径 横径	底 横 残存径	深 高	写 真 版	登 録 番 号	備 考
			外 面	内 面						
1	土器器・杯	S 105・P3堆土	ロクロナデ、底面：刮削系切り	ヘラミガキ・黑色施用	(13.5) 15/24	5.0 24/24	4.9	2-1	R1	BV組
2	土器器・杯	S X06・堆土	ロクロナデ、底面下半：手持ち ヘラミガキ、底面：刮削系切り	ヘラミガキ・黑色施用	(14.2) 19/24	6.0 24/24	4.4	2-2	R2	BB c組
3	土器器・杯	S X06・堆土	ロクロナデ、底面：刮削系切り	ヘラミガキ・黑色施用	(13.0) 15/24	5.8 24/24	4.9	2-3	R3	BV組
4	土器器・杯	S X06・堆土	ロクロナデ、底面下半～底面： 手持ち～ヘラミガキ	ヘラミガキ・黑色施用	(14.0) 17/24	7.5 24/24	5.8	2-4	R4	BB組
5	土器器・杯	S X06・堆土	ロクロナデ、底面下半～底面： 手持ち～ヘラミガキ	ヘラミガキ・黑色施用	(14.1) 17/24	5.7 23.5/24	4.8	2-5	R5	BB組
6	土器器・杯	S X06・堆土	ロクロナデ、底面下半：手持ち ヘラミガキ、底面：刮削系切り	ヘラミガキ・黑色施用	(13.5) 16/24	5.8 24/24	4.6	2-6	R6	BB c組
7	かわらけ	S DDBB・理土上層	ロクロナデ、底面：刮削系切り	ロクロナデ"	(8.0) 5/24	(5.8) 5/24	2.0		R11	
8	かわらけ	S DDBB・理土上層	ロクロナデ、底面	ロクロナデ"	(8.8) 4/24	(5.8) 7/24	1.9		R13	
9	製陶土器	S X06・堆土	—	—	—	—	—		R9	
10	砂輪車	S 105・P3堆土	円盤径:5.5 厚さ:0.9 幅径:0.8					2-7	R2	鉄製
11	砾石	S DDBB・理土下層	長さ:13.1 幅:5.5 厚さ:5.6	通面凹面 線状・溝状痕あり	宝山岩			2-8	R10	
12	砾石	S DDBB・理土上層	長さ:35.1 幅:14.4 厚さ:5.7	通面凹面 砂岩				2-9	R7	

第4図 出土物

は、土師器杯・甕、須恵器杯、焼けた粘土片が若干出土した。

#### S X06

調査区東寄り、S I 05竪穴住居跡貼床除去後のⅢ層上面で発見した。S I 05竪穴住居跡、S D02溝跡と重複し、それよりも古い。形態・規模ともに不明な部分が多いが、深さは3cmを計る。埋土は、黒褐色粘質土（10YR3/1）の單層である。遺物は、土師器杯（B IIc・B V類）・甕（A・B類）、須恵器甕、製塙土器（第4図9）、刀子、焼けた粘土片が出土した。土師器杯のうち図示できたのは、第4図2～6の5点である。

#### ピット群

調査区の全域、S I 05竪穴住居跡、S D03溝跡埋土上面で発見した。S I 05竪穴住居跡、S D03溝跡と重複し、それよりも新しい。列状に並ぶところもあるが、具体的な建物等の構成は不明である。平面形は円形、隅丸方形、不整方形と一樣ではなく、大きさも一辺10～40cm、深さ5～40cmとばらつきがある。埋土は、黒褐色粘土質シルト（10YR3/1）で、Ⅲ層ブロックを含むものが多い。遺物は、土師器、須恵器の細片が出土した。

### 3.まとめ

- (1) S I 05竪穴住居跡は、周溝・主柱穴（1基）・付属ピット・貼床の一部を検出した。年代は、出土遺物（土師器）の特徴から平安時代と考えられる。
- (2) S D03溝跡は、当初幅4.3m、深さ1mのもの（A期）を西側から埋め戻し、幅2.5m、深さ0.5mの規模（B期）に造り替えていることが確認された。年代は、S I 05竪穴住居跡を壊して造られていることや出土遺物（かわらけ）の特徴から中世と推定される。
- (3) 今回の調査で発見した大規模な溝跡は、中世城館八幡館に関連する空堀の可能性も考えられる。

#### 【引用・参考文献】

- 柴桃正隆：「多賀城市内の古跡跡」『史料仙台領内古城館』第3巻 1973  
加藤孝・野崎準：「多賀城市内の創跡」『東北学院大学東北文化研究所紀要』5号 1973  
藤沼邦彦（編）：『宮城県』『日本城郭大系』第3巻 1981  
多賀城市：「八幡館跡」『多賀城市史』第4巻 考古資料 1991



調査区遺構検出状況 西より



S D03A・B溝跡 東より



S D03A・B溝跡土層堆積状況



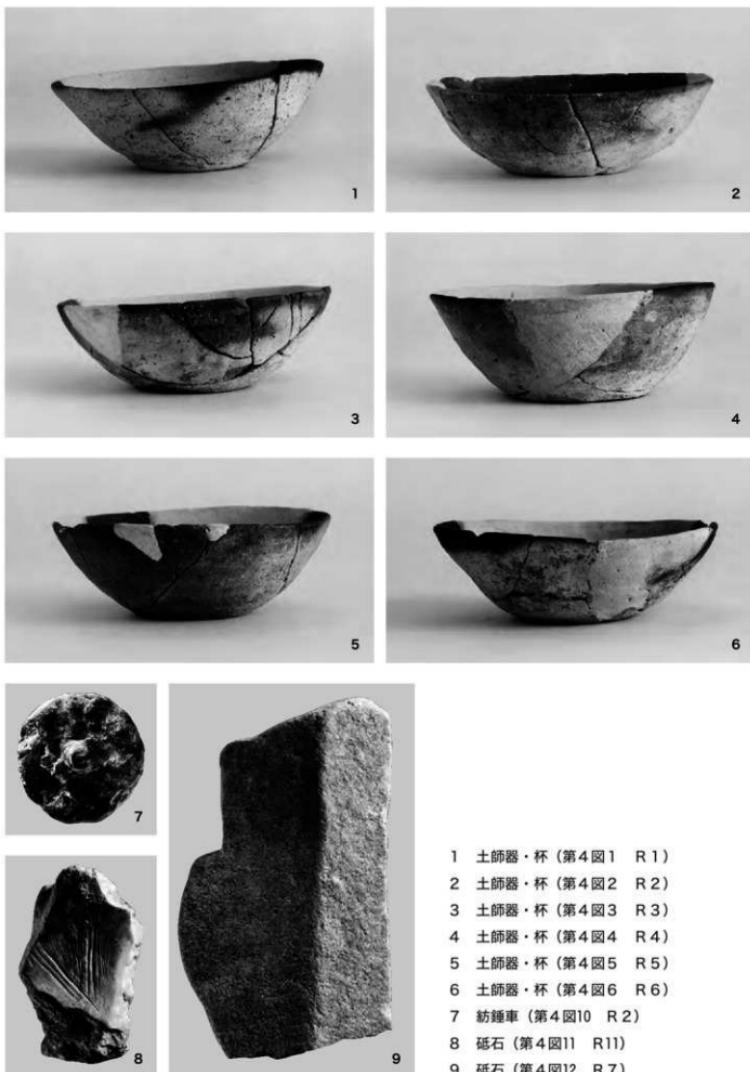
調査区遺構完掘状況 東より



S K01土壤土層堆積状況



S I05堅穴住居完掘状況 南より



- 1 土師器・杯（第4図1 R 1）
- 2 土師器・杯（第4図2 R 2）
- 3 土師器・杯（第4図3 R 3）
- 4 土師器・杯（第4図4 R 4）
- 5 土師器・杯（第4図5 R 5）
- 6 土師器・杯（第4図6 R 6）
- 7 紡錘車（第4図10 R 2）
- 8 延石（第4図11 R 11）
- 9 延石（第4図12 R 7）

写真図版2

### III. 八幡館跡第2次調査

#### 1. 調査に至る経緯と経過

本調査は、宅地造成工事に伴う確認調査として実施したものである。平成15年6月に地権者より当該地における宅地開発計画の提示があり、これを受けて本市教育部文化財課と埋蔵文化財調査センターで調査方法・日程等の協議を行う。当該地は、八幡館跡が所在する低丘陵の南東部に位置し、「本丸」と呼ばれる丘陵頂部の平場からは東方に約150mの距離にある。また、先に実施した第1次調査区の南東側に隣接する。本遺跡については宅地化が著しく、これまで本格的な発掘調査も行われていないため、当該地における遺構の有無や後世の改変の状況等を具体的に把握することを目的として、確認調査を実施するに至ったものである。

調査においては、対象地のうち道路予定地に3ヶ所、宅地予定地に5ヶ所の計8ヶ所にトレントを設定した。各トレントの規模は、3m×6mを基本とした。

調査は、7月31日から開始し、間に夏季休暇等をはさんで8月22日に終了した。調査の結果、対象地中央付近の宅地部分に設定した3・4トレントで、堅穴住居跡、溝跡、小柱穴を確認した。この西側の同じく宅地部分にあたる1・2トレントにおいては、一部で岩盤が露出ししているなど後世の削平がおよび、遺構は発見されなかった。これらの宅地部分では厚く盛土がされており、現地表面から遺構確認面までの深さは0.75～0.9mである。一方、この南側については東西方向の道路予定地のや北側のラインから、旧地形が南側に向かって急激に落ち込むことを確認した。この比高差は2m以上におよび、さらに後世の削平をものがたるように、盛土の下はじかに岩盤になっている。

#### 2. 調査成果

##### (1) 発見遺構と遺物

###### S 111堅穴住居跡

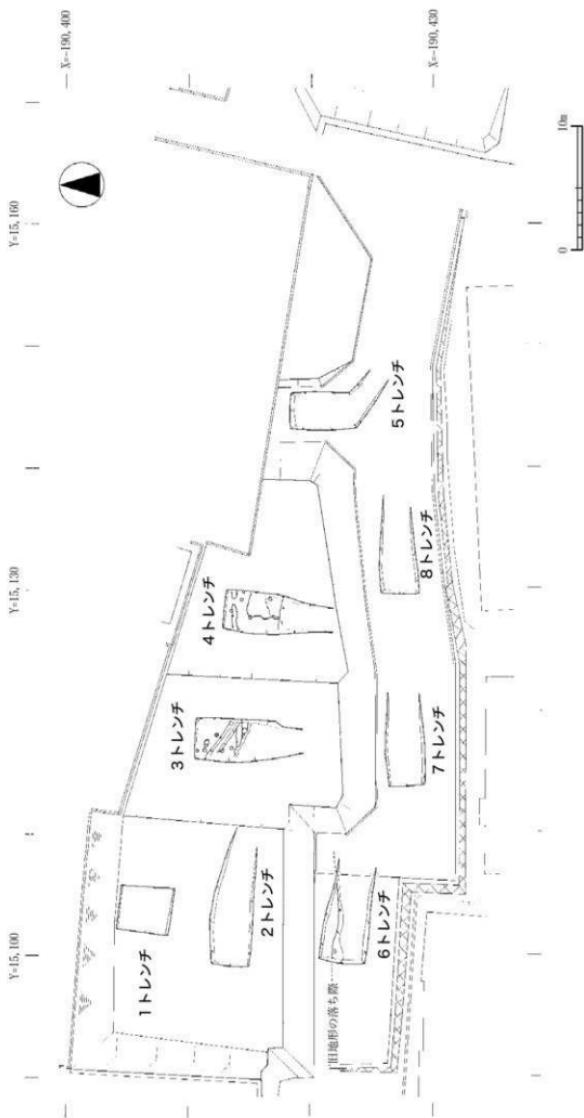
4トレントの中央付近で発見した住居跡である。トレント内にはその西半部がかかっている。また、南半部は段状に後世の削平を受けており、削平が浅い箇所では周溝かくろうして確認できるが、その南側ではすべて壊されている。遺物は、確認面から土師器杯(B IIc類 第4図1)が出土している。なお、確認段階でとどめているため、このほかの詳細については不明である。

###### SD12溝跡

3トレント中央付近と4トレント北側で発見した東西方向の溝跡で、規模や方向、位置関係から同一の



第1図 調査区位置図



第2図 トレンチ配置図

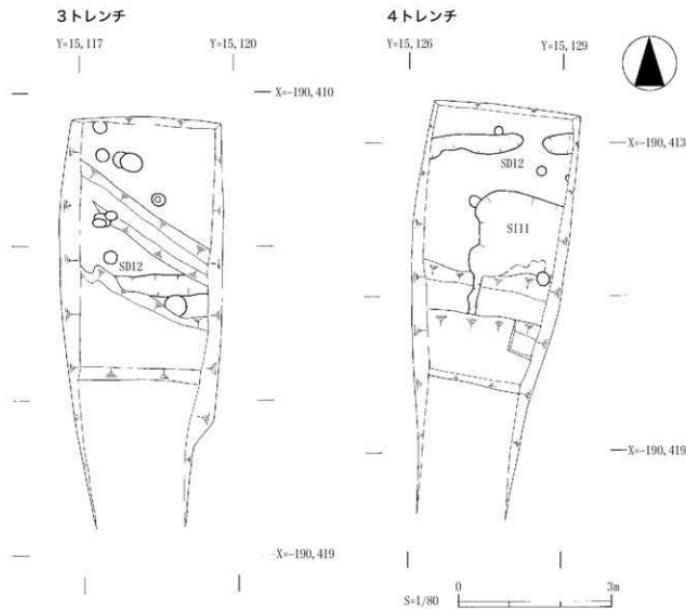
溝跡とした。方向は、東で約2度北に偏している。規模は、上幅で38～44cmである。なお、4トレンチにおいて一部途切れる箇所が認められるが、これが意図的な掘り残しによるものか、後世の削平によるものかは判断できなかった。

#### 柱穴およびピット

3トレンチと4トレンチで計15基発見している。平面形は円形及び梢円形を呈する。規模は径15～44cmであるが、径25cm前後のものが多い。

#### 堆積土出土遺物

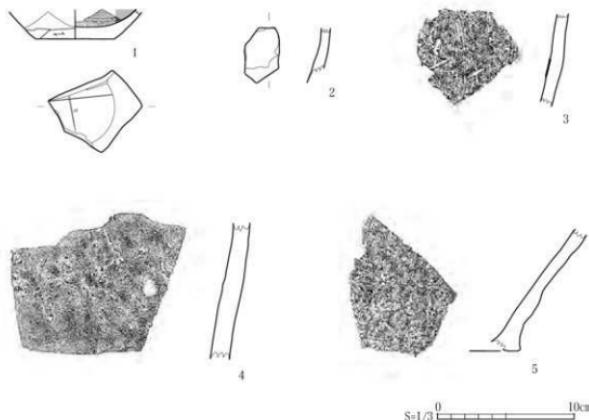
遺構の掘り込みを行っていないため、出土遺物は大部分が堆積土出土のものである。種類には、古代の土師器・須恵器、中世の施釉陶器・無釉陶器がある。このうち、施釉陶器（第4図2）は2トレンチから出土した破片で、灰釉を施した瀬戸窯産の瓶子とみられる。無釉陶器（第4図3～5）は、3・4トレンチから出土している。いずれも甕の破片で、東海地方あるいは在地窯の製品とみられる。



第3図 3・4トレンチ平面図

### 3.まとめ

- (1) 本調査の対象地では、ほぼ全域で削平や盛土による後世の改変が行われていることを確認した。
- (2) 対象地中央付近では遺構が残存しており、竪穴住居跡1軒、溝跡1条、柱穴およびピットを発見した。
- (3) 竪穴住居跡の年代は、出土遺物等から平安時代に属するとみられる。他の遺構の年代については不明である。



番号	種類	トネ	裏 面	特徴	口		裏 面	裏 面	可 用	標 記	備 考	
					外 面	内 面						
1	土器蓋・杯	4 T	SII	ロクロナデ、底部半円形切り 1軒 →手捺ちへタケヅリ	—	(5.8) 5/24	—	—	—	1-1	R 1	底部に「×」のヘラガキ
2	施釉陶器・瓶子	2 T	I 製	ロクロナデ→施釉 (K粗)	ロクロナデ	—	—	—	—	1-2	R 2	
3	施釉陶器・甕	4 T	I 製	ナデ	ナデ	—	—	—	—	1-3	R 3	
4	施釉陶器・甕	4 T	I 製	ナデ	—	—	—	—	—	1-4	R 4	内面研磨
5	施釉陶器・甕	3 T	I 製	ナデ	—	—	—	—	—	1-5	R 5	内面研磨

第4図 出土遺物



調査前状況 東より



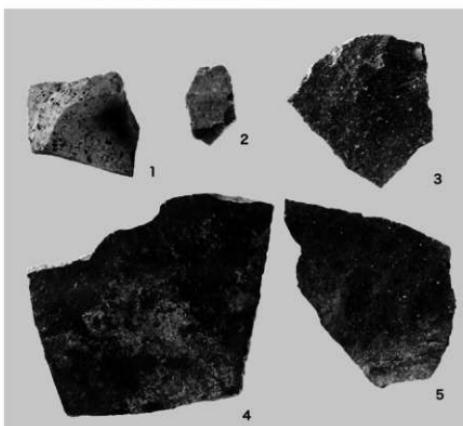
6 トレンチ掘り下げ状況 東より



3 トレンチ遺構確認状況 東より



4 トレンチ遺構確認状況 南より



- 1 土師器・杯（第4図1 R1）
- 2 施釉陶器・瓶子（第4図2 R2）
- 3 無釉陶器・甕（第4図3 R3）
- 4 無釉陶器・甕（第4図4 R4）
- 5 無釉陶器・甕（第4図5 R5）

写真図版1

## IV. 西原遺跡第2次調査

### 1. 調査に至る経緯と経過

本調査は、個人住宅建設に伴うものである。今回の建設工事は、住宅の基礎工法に直径20cmの支柱杭を地下4mまで打ち込む、いわゆるパイル工法をとることから、地下の埋蔵文化財に影響を及ぼすことが考えられた。南東側に隣接する第1次調査では、遺構を見発できなかったため、これまで遺跡の実態としてはわかつていなかった。そのため、はじめに試掘調査を実施し、遺構を発見した場合に本発掘調査を行うこととした。地権者から平成15年8月4日付で発掘調査の依頼があり、それを受け同日から現地において重機による表土除去を行ったところ、地表から1.6m下で遺構を発見した。これにより本発掘調査へ切り替えることになったが、盛土が厚かったため調査区の面積は制限された。5日に、遺構の埋土を掘り下げると共に、随時遺構の実測・写真撮影などの記録作成を行った。6日に埋め戻しと器材の撤収を行い、一切の調査を終了した。



第1図 調査区位置図

### 2. 調査成果

#### (1) 基本層序

- I 層：現代の盛土層で、層厚は約1.6m。
- II 層：調査区の西半部に堆積する明褐色砂層で、層厚は約10cm。
- IIIa層：調査区の東半部に堆積する明褐色砂層。遺構検出面。
- IIIb層：調査区の全域に堆積する黒褐色砂層。遺構検出面。

#### (2) 発見遺構

##### S B03掘立柱建物跡

調査区北側のIIIa層上面で発見した。調査区の範囲が狭いため全容は不明であるが、東西2間以上の柱列から推定した掘立柱建物跡である。全ての柱穴に抜取穴があり、柱痕跡は確認できなかつた。方向は東で32度北に偏している。柱間は約1.8mである。柱穴の平面形は方形で、規模は一辻38~48cmである。遺物は出土していない。

##### S D01溝跡

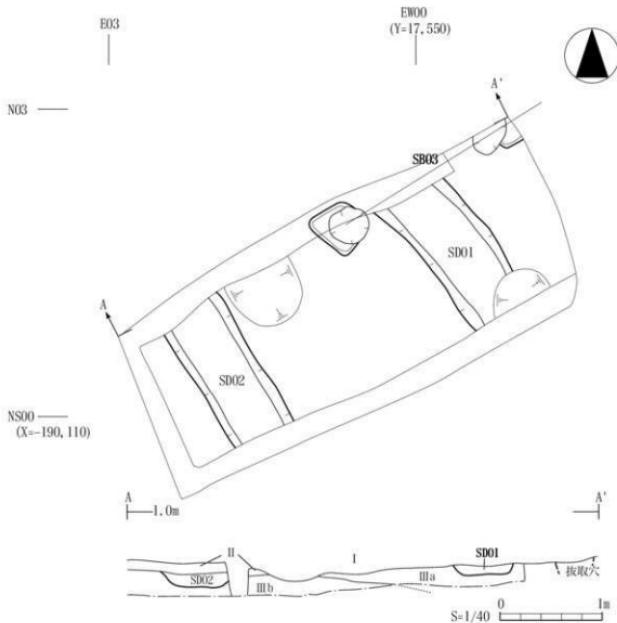
調査区の東側のIIIa層上面で発見した溝跡である。S B03と重複しているが、その新旧関係は確認できなかつた。規模は長さ1.5m以上、上幅65~73cm、下幅45~51cm、深さ10~24cmである。方向は西で39度北に偏している。断面形は逆台形で壁は斜めに立ち上がつていて、底面はほぼ平坦で、調査区内での比高はほとんどない。埋土は1層で、IIIb層をブロック状に含む褐色砂層である。遺物は出土していない。

### S D02溝跡

調査区の西側のIIIb層上面で発見した溝跡である。規模は長さ1.4m以上、上幅60~68cm、下幅45~48cm、深さ10~22cmである。方向は西で31度北に偏している。断面形は逆台形で壁は斜めに立ち上がっている。底面はほぼ平坦で、調査区内での比高はほとんどない。埋土は1層で、IIIb層をブロック状に含む黒褐色シルト層である。遺物は出土していない。

### 3.まとめ

- (1) 今回の調査で発見した遺構は、掘立柱建物跡1棟、溝跡2条である。その年代についての手掛かりは得られなかった。
- (2) 西原遺跡ではこれまで遺構を確認しておらずその実態も不明であったが、今回の調査で初めて遺構を発見した。これらの遺構は調査区の外へ延びていることから、盛土の下には他にも遺構が存在すると考えられ、今後の調査でその広がりや年代、性格などを明らかにする必要がある。



第2図 遺構平面図・断面図

## V. 西沢遺跡第11次調査

### 1. 調査に至る経緯と経過

本調査は、個人住宅の擁壁設置工事に伴うものである。当該地は、西沢遺跡のほぼ中央に位置し、平成10年度に南側隣接地で実施した発掘調査において、古代の柱穴等が発見されたことから、同様の遺構の存在が予想された。計画では、申請者の自宅敷地内のうち道路に面した東端部で工事を実施するもので、設置するL字型擁壁の基底部幅は1.3~4mである。工事にあたっては、この幅に合わせて現地形の掘削を行うことから、遺構への影響が考えられたため、本発掘調査として調査を実施するに至ったものである。

調査においては、掘削幅が一番大きく、さらに調査可能な条件をもつ対象地南端部に、東西に長い調査区を設定した。

調査は7月23日から開始した。現地表面から0.8~1.0m掘り下げた段階で、調査区東半部で遺物を含む堆積土（II層）を、西半部では柱穴等の遺構を確認した。その後II層を除去し、さらに数基の柱穴を検出した。柱穴等の掘り込み、図面作成等を終了した後、これらの検出面であるIII層を掘り下げた。その結果、下層のIV層上面においても柱穴を検出した。調査は、その後の降雨によって一時中断したが、8月5日をもって終了した。

### 2. 調査成果

#### （1）基本層序

I層：表土。

IIa層：褐灰色シルト（10YR4/1）で、層厚は10~20cm。調査区東半部に堆積する。下層のIIb層・IIc層との境に灰白色火山灰の薄い層がわずかに認められる。また、IIb層・IIc層とともに古代の土器片を含む。

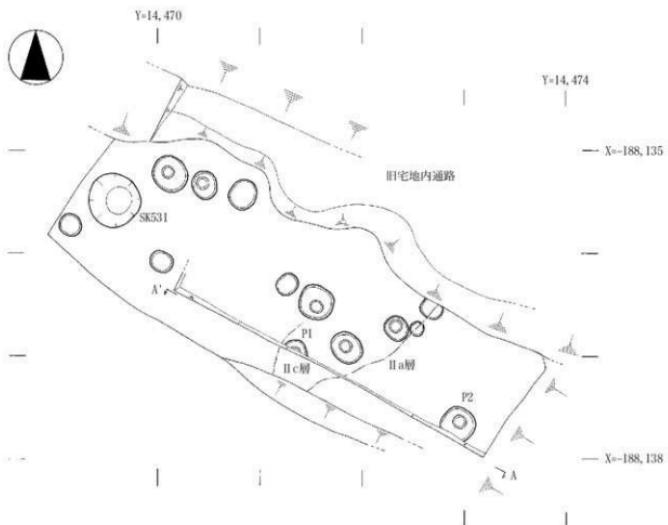
IIb層：黒褐色シルト（10YR3/1）で、層厚は約5cmと薄い。IIa層範囲の西端付近に幅40~50cmの帶状に堆積する。

IIc層：褐灰色シルト（10YR4/1）で、層厚は約10cm。IIa層の西側に堆積する。

III層：にぶい黄褐色シルト（10YR4/3）で、層厚は約20cm。調査区全域に堆積する。上面が柱穴及び土塊の検出面。また、古代の土器片と瓦片を含む。



第1図 調査区位置図



部位	土色・土性	備考	部位	土色・土性	備考
基本剖面					
I	褐褐色シルト (10YR3/3)	表土	P 1	褐灰色シルト (10YR4/1)	
II a	褐褐色シルト (10YR4/1)	下層との境に灰白色火山灰を若干含む。	2	灰褐色シルト (10YR4/2)	に赤い黄褐色シルトを多く含む。
II b	褐褐色シルト (10YR3/1)	に赤い黄褐色シルトを斑状に含む。	P 2	灰褐色シルト (10YR4/2)	
II c	褐褐色シルト (10YR4/1)	に赤い黄褐色シルトを斑状に含む。	3	黄褐色シルト (10YR4/1)	
III	に赤い黄褐色シルト (10YR4/3)		4	褐灰色シルト (10YR4/1)	
IV	に赤い黄褐色シルト (10YR5/3)		5	褐灰色シルト (10YR4/1)	

第2図 遺構平面図・断面図

IV 層：にぶい黄褐色シルト（10YR5/3）で、層厚は5cm以上。調査区の西端付近から東側に堆積している。東側ほど層厚が増すと推定される。上面が柱穴の検出面。

## （2）発見遺構と遺物

### S K531土壤

調査区西端部のⅢ層上面で発見した小規模な土壙である。平面形はほぼ円形で、断面形はすり鉢形に近いが、東側では壁の立ち上がりがやや急である。規模は直径約50cm、深さは約20cmである。埋土は黒褐色シルト（10YR3/1）の単層で、焼土粒、炭化物を含む。遺物は、土師器杯・甕（B類）、須恵器杯・甕、丸瓦が出土している。

### 柱穴およびピット

調査区のほぼ全域で発見している。発見した15基のうち、調査区東端部に位置するP2のみがIV層上面検出で、他はすべてⅢ層上面での検出である。また、これらのうち7基で柱痕跡を確認できたが、調査区が狭いため建物等として組み合うまでには至らなかった。平面形は円形もしくは方形であり、前者が径22～36cm、後者が一辺32～34cmである。深さは13～55cmであるが、30cm前後のものが多い。埋土は、柱痕跡か褐灰色及び黒褐色シルト（10YR4/1・3/1）、掘り方は地山土を斑状に含む灰黄褐色シルト（10YR4/2）でほぼ共通している。遺物は、土師器杯・甕（B類）、須恵器杯・蓋・瓶・甕、丸・平瓦が出土しているが、いずれも破片である。

## 3.まとめ

今回の調査で発見した柱穴等の年代については、少なくともⅡ層に覆われるものは、Ⅱ層内で確認できる灰白色火山灰の降下年代から、10世紀前葉以前とみることができる。また、Ⅱ層の堆積がみられない調査区西半部検出の各柱穴についても、形態や規模、埋土の状況等に違いが認められることから同一時期のものと判断した。一方、上限年代については、破片ではあるが比較的出土量が多いⅢ層出土の遺物をはじめ、いずれの出土遺物にも非ロクロ調整の土師器（A類）が認められないことや、杯類の底部に再調整を施したもののが確認できることなどから、8世紀代にはさかのぼらないと考えられる。したがって、本調査における発見遺構の年代は、大きくとらえて9世紀から10世紀前葉までに位置づけられると考えられる。



表土除去状況 北東より



遺構検出状況 北西より



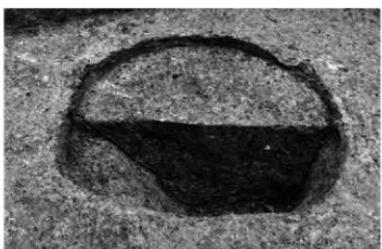
遺構検出状況 北より



遺構検出状況 北西より



遺構掘り込み状況 北西より



S K531半截状況 南東より



III層掘り下げ状況 北西より



III層掘り下げ状況 北より

## VI. 高崎遺跡第41次調査

### 1. 調査に至る経緯と経過

本調査は、宅地造成工事に伴う発掘調査である。平成15年4月9日、地権者より当該区における宅地造成工事と埋蔵文化財のかかわりについての協議書が提出された。計画では、敷地南側を約2.2m掘削し、駐車場を建設することから、埋蔵文化財への影響が懸念された。ただし、本地区周辺では、発掘調査例が少ないとから、事前に確認調査を実施し、遺構が発見された時点で本発掘調査に切り替えることとした。4月11日、地権者より埋蔵文化財包蔵地に係る発掘調査についての依頼を受け、16日に確認調査を実施した結果、盛土下約1.6mで土壇、溝が発見されたことから、直ちに本発掘調査に移行した。17日、遺構埋土の掘り込み及び写真撮影を行う。18日、光波測距儀を用いて遺構平面図を作成し、一切の調査を終了した。

### 2. 発見遺構と遺物

#### S D1609溝跡

地山上面で発見した南北方向の溝跡である。北端部でS K1610土壇と接続している。方向は、発掘基準線と概ね一致する。規模は、長さ1.6m以上、上幅0.7m、下幅0.4m、深さは最も深い箇所で0.15mである。断面形はU字状であり、壁は緩やかに立ち上がっている。埋土は、褐灰色粘土(10YR4/1)であり、明黄褐色粘質土(10YR6/6)がブロック状に多く混入する。遺物は出土していない。

#### S K1610土壇

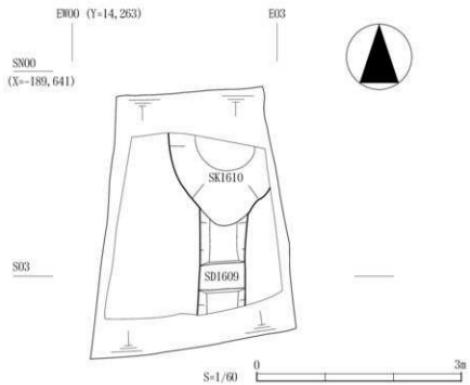
地山上面で発見した土壇であり、南側でS D1609溝跡と接続している。長軸1.2m以上、深さ約1mである。埋土は、黒褐色粘質土(10YR3/1)であり、明黄褐色粘質土(10YR6/6)がブロック状に混入している。遺物は、須恵器甕がある。

### 3.まとめ

今回の調査では、地山上面で溝跡、土壇を発見した。年代については、須恵器甕の小片が出土するのみであることから、概ね古代の範疇で捉えておきたい。



第1図 調査区位置図



第2図 遺構平面図



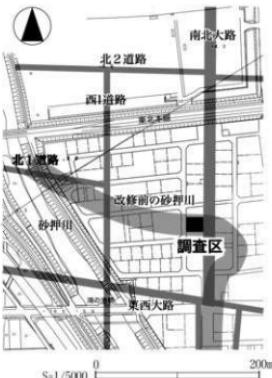
写真図版1 調査区全景 南より

## VII. 市川橋遺跡第39次調査

### 1. 調査に至る経緯と経過

本調査は、個人住宅建設に伴う発掘調査である。平成15年5月、地権者より当該区における住宅建築と埋蔵文化財のかかわりについての協議書が提出された。建築計画では、基礎工事の際に、直径60cm、長さ6.1mの杭基礎を打ち込むことから、直ちに本発掘調査に関する協議を実施した。7月9日、地権者より埋蔵文化財包蔵地に係る発掘調査についての依頼を受け、8月1日より調査を開始した。

調査は、住宅建設部分の表土除去から入ったが、盛土及び旧水田耕作土の下は全て近・現代の河川埋土であることが判明した。同日、調査区の全景写真及び北西部の土層柱状図と調査区範囲図を作成する。重機による調査区の埋め戻しを行い、一切の調査を終了した。



第1図 調査区位置図

### 2. 調査成果

河川改修前（昭和26年以前）の砂押川の流路を確認した。河川堆積土は現表土から2.5mの深さに達している。河川堆積土の下層には、オリーブ黒色（5Y3/2）の垂泥炭層の堆積が認められた。遺物は出土していない。



第2図 調査区平面図・断面図

## VIII. 市川橋遺跡第40次調査

### 1. 調査に至る経緯と経過

本調査は、個人住宅建設に伴って実施したものである。今回の建設工事は基礎工法に地下10mまで鋼管を打ち込むパイル工法を採っていることから、地下構造に影響を与えることが考えられた。当該区周辺は、城南土地区画整理事業に伴う発掘調査が実施されており、古代・近世の河川跡の存在が当初より予想された。そのため発掘調査の実施の協力を地権者に求め、平成15年8月15日に発掘調査の依頼を受けて本発掘調査に至ったものである。

調査は9月9日より着手し、はじめに重機により盛土、現代の水田耕作土の除去作業を行った。その後古代の河川跡を確認し、さらに現地表下約3.5mまで掘り下げた。10日に調査区の全景写真撮影後、土層断面図を作成し、11日には埋戻し作業を行い全ての調査を終了した。



第1図 調査区位置図

### 2. 調査成果

#### (1) 基本層序

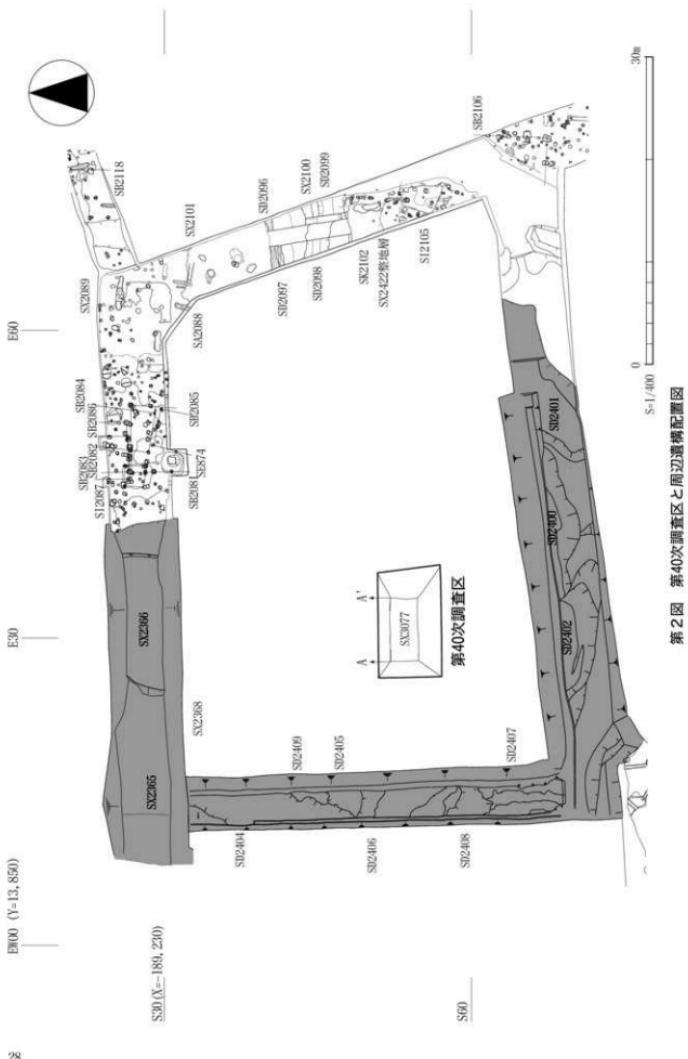
今回の調査で確認できた層序は以下のとおりである。これらの層は調査区全域に分布している。

- I 層：現代の盛土で、層厚は1.35～1.5m。
- IIa層：オリーブ黒色粘土（7.5Y3/1）で、層厚は15～20cm。現代の水田耕作土。
- IIb層：暗灰黄色粘土（2.5Y4/2）で、層厚は11～20cm。現代の水田耕作土。
- IIc層：黒褐色粘土（2.5Y3/2）で、層厚は13～33cm。現代の水田耕作土。

#### (2) 発見遺構と遺物

##### S X3077河川跡

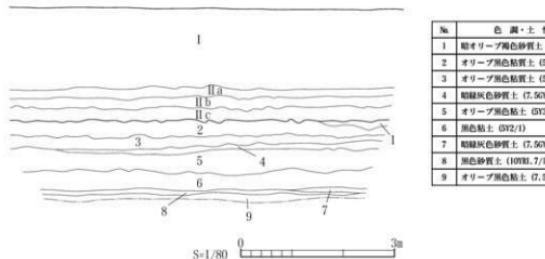
調査区全域で発見した河川跡で、深さは1.5m以上である。埋土は9層に区分され、粘質土と砂質土の互層で、いずれも水平に堆積している。5層には灰白色火山灰粒を含んでいる。遺物は6層から土師器杯が出土しており、5層から円面鏡が出土している。遺物は土師器杯（B I・B II類）・甕（B類）、須恵器杯・甕・長頸瓶、須恵系土器皿・高台付皿、円面鏡、平瓦（II A類）があり、いずれも5・6層から出土している。



第2図 第40次調査区と周辺構配図

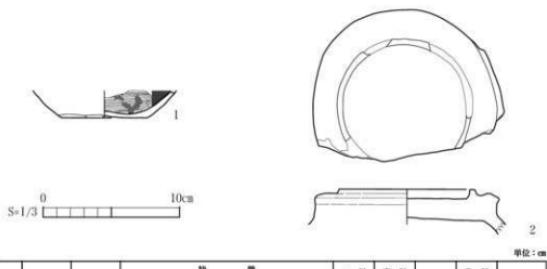
Δ  
↓ 6.0m

A'



No.	色・潤・土性	備考
1	暗オリーブ褐色粘質土 (2.5/3/3)	
2	オリーブ黑色粘質土 (3/3/2)	褐色鉄、砂を含む。
3	オリーブ黑色粘質土 (3/3/1)	砂を含む。
4	暗緑灰色粘質土 (7.5/3/1)	砂、礫を含む。
5	オリーブ黑色粘質土 (3/3/1)	褐色火山灰粒を含む
6	黑色粘質土 (3/2/1)	砂を含む
7	暗緑灰色粘質土 (7.5/3/1)	砂、礫を含む
8	黑色粘質土 (10.0/1.7/1)	
9	オリーブ黑色粘質土 (7.3/3/2)	腐化物ブロックを含む

第3図 調査区北壁断面図



番号	種類	遺構・部位	特 徴		口 径 既存率	底 径 既存率	器 高	登 彙 登 彙 号	備 考	単位：cm
			外 面	内 面						
1	土師器・杯	6層	ロクロナデ、体面下平：底面 手持ちハラケザリ、	ハラミガキ、黑色處理	(6.2) 8/24		R.2			
2	円筒瓶	5層	ロクロナデ	ロクロナデ	10.0 13/24		R.1			

第4図 S X 3077河川跡出土遺物

### 3.まとめ

- (1) 本地区周辺ではS X 2366河川跡をはじめ多くの河川跡が発見されており、今回発見したS X 3077河川跡もこれらいずれかの河川跡に相当すると考えられる。
- (2) 年代については、灰白色火山灰粒を含む5層以下が古代の河川跡と考えられる。なお、1～4層の詳細な年代は不明である。

## IX. 市川橋遺跡第41次調査

### 1. 調査に至る経緯と経過

本調査は、個人住宅建設に伴って実施したものである。今回の建設工事は基礎工法に地下5.5mまで鋼管を打ち込むパイロット工法を探っていることから、地下遺構に影響を及ぼすことが考えられた。そのため発掘調査の実施の協力を地権者に求め、平成15年10月31日に発掘調査の依頼を受けて本発掘調査に至ったものである。

調査は平成15年11月12日より着手し、はじめに重機によって盛土除去作業を行った。終了後遺構検出作業に入り、溝跡、河川跡、土壌を検出した。埋土の掘り下げが終了した遺構については、随時写真撮影、平面図・断面図を作成した。21日には全景写真撮影を行い、28日に補足調査を行い、発掘器材を撤収し全ての調査を終了した。

### 2. 調査成果

#### (1) 基本層位

今回の調査で確認できた層序は、以下のとおりである。

I層：現代の盛土で、層厚は約2.2m。

II層：現代の水田耕作土で、層厚は17～34cm。

III層：黒褐色粘土（2.5Y3/1）で、調査区全域に分布する。層厚は5～21cm。

IV層：黒褐色粘質土（2.5Y3/2）で、調査区全域に分布する。層厚は4～14cm。

V層：黄灰色粘質土（2.5Y4/1）で、調査区東半部に分布する。層厚は3～12cm。灰白色火山灰粒を含む。

VI層：黄褐色砂質土（2.5Y5/3）で、調査区ほぼ全域に分布する。層厚は6～25cm。発見した全ての遺構を覆っている。

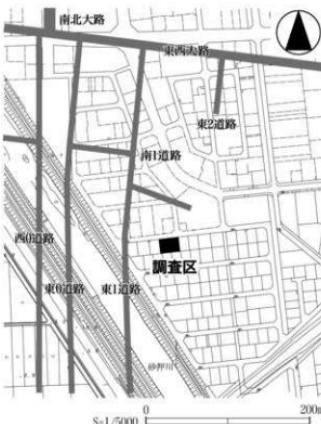
VII層：黒褐色砂質土（2.5Y3/1）で、調査区東半部にかけて分布する。層厚は5～13cm。溝跡の検出面。

VIII層：黄褐色砂質土（2.5Y5/3）で、調査区東半部に分布する。層厚は4～10cm。河川跡、土壌の検出面。

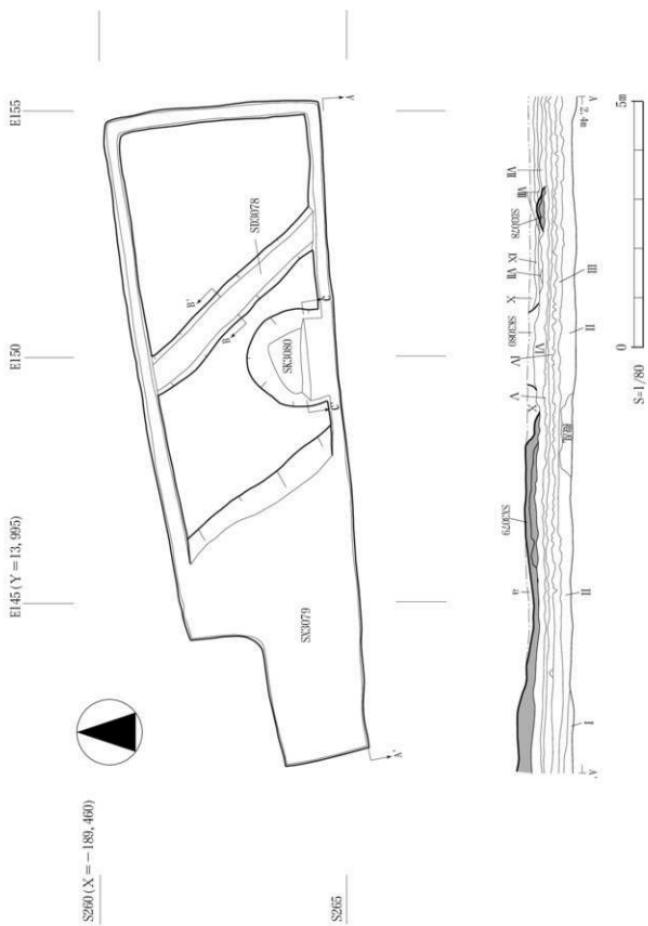
#### (2) 発見遺構と遺物

##### S D3078溝跡

調査区東半部のVII層上面で発見した溝跡である。方向は北で約44度西に偏している。確認できた長さは約5.2mで、上幅60～78cm、下幅38～55cm、深さは15～18cmである。断面形は逆台形で、底面は平坦である。

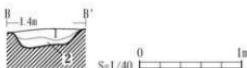


第1図 調査区位置図



第2圖 遺構平面圖・断面図

埋土は2層に区分され、いずれも黒褐色粘土を主体とするが、下層には黄褐色砂質土ブロックを多く含んでいる。遺物は土師器甕（B類）、須恵器甕が出土している。

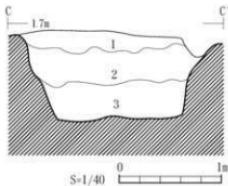


No	色調・土性	備考
1	黒褐色粘土 (2.93/2)	
2	黒褐色粘土 (2.93/2)	黄褐色土ブロックを多く含む

第3図 S D3078溝跡断面図

#### S K3080土壤

調査区中央部南部のⅧ層上面で発見した土壤である。遺構の南側は調査区外に延びている。規模は南北1.8m以上、東西約2m、深さは0.85mである。断面形は逆台形で、底面は多少凹凸が見られる。埋土は3層に区分され、2・3層は多量の黄褐色砂質土ブロックを含むことから人為的埋め戻し土である。遺物は土師器甕（B類）、須恵器甕、長頸瓶、平瓦（IA類）が出土している。



No	色調・土性	備考
1	黒褐色粘土 (2.93/2)	
2	黒褐色粘土 (10023/1)	多量の黄褐色砂質土ブロックを含む
3	オリーブ褐色土 (3N3/1)	多量の黄褐色砂質土ブロックを含む

第4図 S K3080土壤断面図

#### S X3079

調査区中央部から西半部にかけてⅧ層上面で発見した西に向かって緩やかに傾斜する落ち込みである。方向は北で約35度西に偏している。確認できた長さは約4mで、規模は上幅5.4m以上、深さは約20cmである。壁の東側は緩やかに立ち上がる。埋土は2層確認した。上層は黒褐色粘土（2.Y3/1）、下層は粒子の粗い砂を含んだ黒色粘土（10YR1.7/1）である。遺物は出土していない。

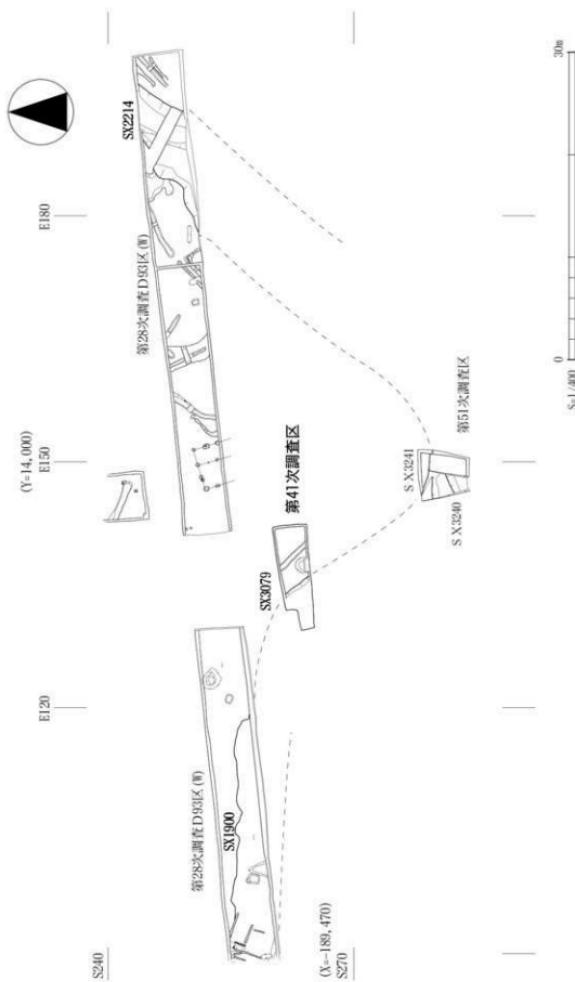
#### (3) 堆積層出土遺物

堆積層から出土した遺物には土師器杯・高台付杯・甕（B類）、須恵器杯（第5図1・I類）、甕・長頸瓶、平瓦（II B類）が出土している。



番号	種類	遺物・部位	特徴		口径 保存率	底径 保存率	高 さ	重 量 kg	登 録 番 号	備 考
			外 面	内 面						
1	須恵器・甕	口部	ロクロナギ 底部：回転ヘラケズリ	ロクロナギ	(14.4) 4/24	(8.2) 9/24	3.3	R1	I類	

第5図 堆積層出土遺物



第6圖 調查區周邊測站配置圖

### 3.まとめ

S D3078・S K3080の年代は、これらの遺構を覆っているV層に灰白色火山灰粒が含まれていることから、10世紀前葉よりは古いが、出土遺物が僅少であるためその上限年代については不明である。S X3079については、第29次調査D93区(W)で発見したS X1900・2214河川跡の埋土と類似することや、S X1900の延長線上に位置することから、これらの河川と同一のものと推定しておきたい。年代については、遺物が出土していないため不明である。



写真図版1 調査区全景 東より

## X. 市川橋遺跡第43次調査

### 1. 調査に至る経緯と経過

本調査は、個人住宅建設に伴って実施したものである。今回の建設工事は、基礎工法に地下8～9mまで鋼管を打ち込むパイリ工法を探っていることから、地下遺構に影響を与えることが考えられた。そのため発掘調査の実施の協力を地権者にもとめ、平成15年12月3日に発掘調査の依頼を受けて本発掘調査に至ったものである。

調査は12月4日より開始し、はじめに重機によって盛土除去作業を行った。8日より遺構検出作業に入り、東西方向の溝跡等を検出する。10日には平面図作成のための基準点を設定した。溝跡については、南1道路跡に伴う南・北側溝と判明し重複関係を確認後、埋土の掘り下げを行った。その後、随時写真撮影、平面図・断面図を作成する。17日には、発掘器材を撤収し全ての調査を終了した。

### 2. 調査成果

#### (1) 基本層序

今回の調査で確認できた層序は以下のとおりである。

- I 層：現代の盛土で、層厚は約2.2m。
- IIa層：現代の水田耕作土で、層厚は9～20cm。
- IIb層：現代の水田耕作土で、層厚は7～23cm。
- III 層：黒色粘土（2.5Y2/1）で、調査区東部に分布する。層厚は2～14cm。
- IV 層：黒褐色粘質土（10YR2/1）で、少量の炭化物を含んでいる。調査区東半部に分布する。層厚は6～30cm。古代の遺構検出面。
- V 層：黄褐色粘質土（2.5Y3/2）で、少量の灰、炭化物、焼土を含む。調査区北東部を除くほぼ全域に分布する。古代の遺構検出面。
- VI 層：黄褐色砂質土（2.5Y5/3）で、古代の遺構検出面（地山）。

#### (2) 発見遺構と遺物

##### S X3140南1道路跡

調査区中央部から南半部で発見した東西方向の道路跡である。本調査区では東西約4.8m検出した。南



第1図 調査区位置図

北両側には、素掘りの側溝（北側溝：S D3141、南側溝：S D3142）を伴っており、S D3141で5時期（a→e期）、S D3142では2時期（a→b期）変遷を確認した。南1道路については、第28次調査D102・105区において発見しており、調査成果より5時期（S X920A→E期）の変遷を確認している。またD・E期は、それ以前のものより約4～5m北側に移動して造り替えられていることが判明している。これらの成果と本調査の成果を対比させると、今回発見した道路側溝は、S D3141 a～cがS X920A～Cの北側溝、S D3141 d・e、S D3142 a・bがS X920D・Eのそれぞれ北・南側溝に相当すると考えられる。以上のことから、今回の調査によって検出した道路についても大きく5時期（A→E期）の変遷と捉えることをとし、以下、各時期について説明を行う。

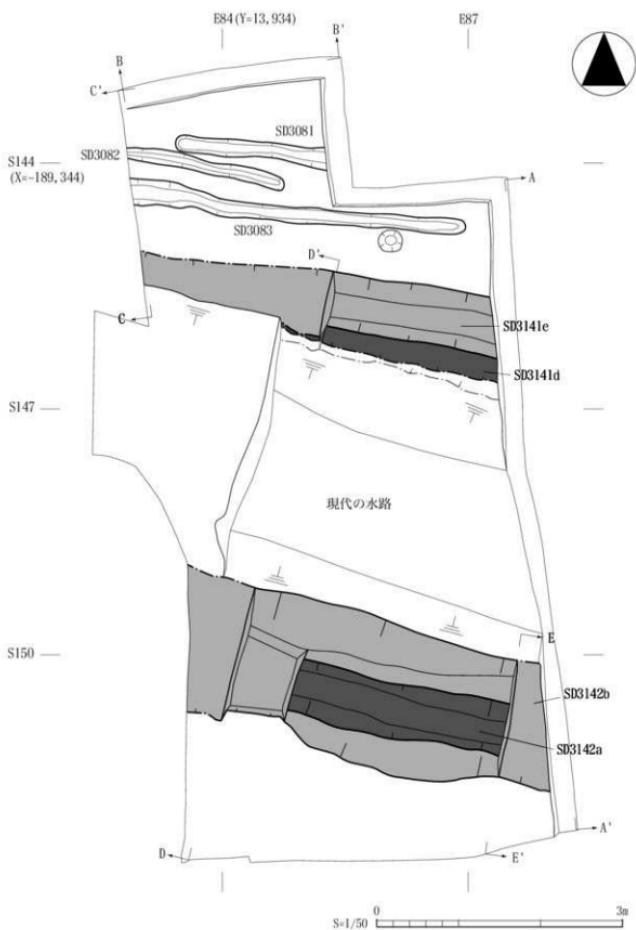
**S X3140A**：北側溝S D3141 aを確認した。路面及び道路の規模は、大部分が調査区外のため不明である。規模は上幅82cm以上、下幅32～51cm、深さは30cmである。壁の立ち上がりはb・c期のため失われ不明である。底面は若干の凹凸が認められる。埋土は多量の地山ブロックや砂粒を含む黒褐色粘質土である。遺物は土師器杯（B II類）・甕（B類）、須恵器杯（V類）・甕が出土している。

**S X3140B**：A期より南側に位置をすらして、北側溝S D3141 bを造り替えている。規模は上幅66～82cm、下幅33～58cm、深さは26cmである。底面は概ね平坦であり、壁は緩やかに立ち上がっている。埋土は炭化物を少量含む黒褐色粘質土である。遺物は土師器杯（B II類）・高台付杯・甕（A・B類）、須恵器甕・瓶が出土している。

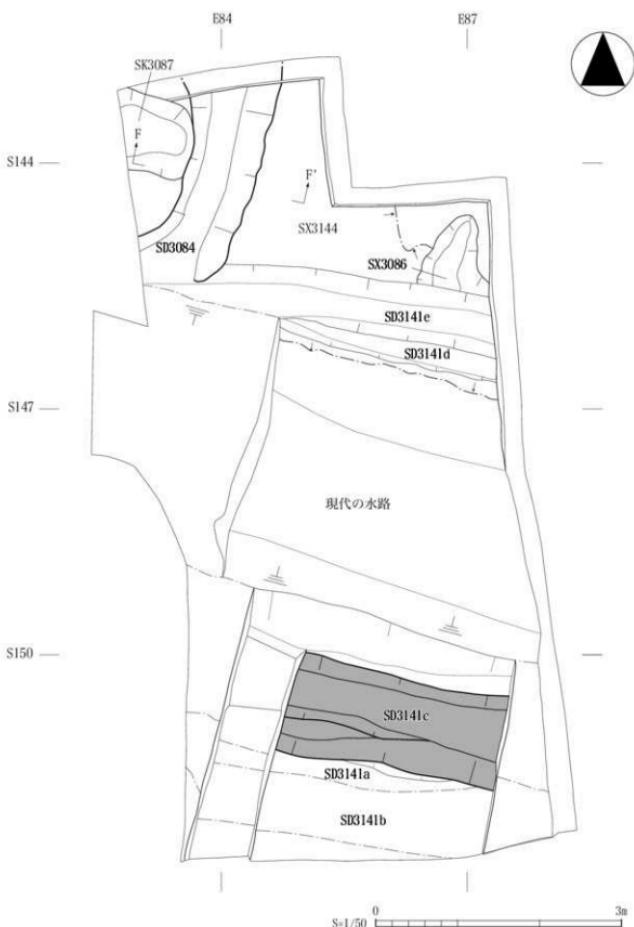
**S X3140C**：B期から約1.5m北側で、北側溝S D3141 cを確認した。規模は上幅1.2m以上、下幅40～60cm、深さは48cmである。南壁は比較的緩やかに立ち上がるが、北壁はS D3142 a・bのため失われている。底面は概ね平坦である。埋土は2層に区分される。黒褐色粘質土を主体とし、埋土中には灰白色火山灰をブロック状に含んでいる。遺物は土師器杯（B II・B V類）・甕（B類）、須恵器杯・甕、須恵系土器杯、砥石が出土している。

**S X3140D**：V層上面で北側溝S D3141 dと南側溝S D3142 aを確認した。北側溝については、C期より北側に約4.8m移動して造り替えられている。両側溝ともほとんどがE期のため失われ、また路面についても現代の水路によって壊されている。路幅は側溝心々間では約4.7mである。側溝の深さは、北側溝が25cm、南側溝が27cmである。埋土は少量の炭化物を含む黒褐色粘質土であり、南側溝では植物遺存体が若干含まれている。遺物は北側溝から土師器杯・高台付杯・甕（B類）、須恵器杯（III類）・甕、須恵系土器杯が出土している。

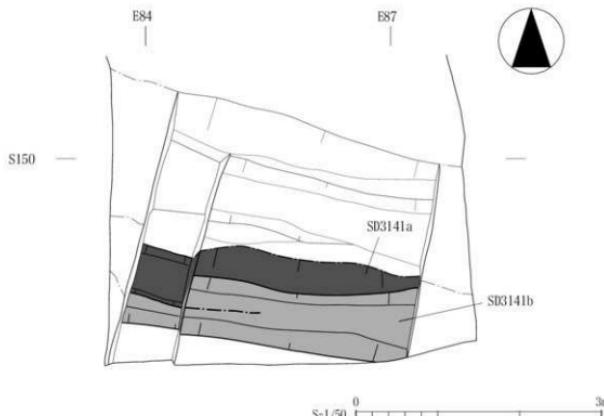
**S X3140E**：V層上面で北側溝S D3141 eと南側溝S D3142 bを確認した。両側溝ともD期とほぼ同位置で造り替えられている。路面は現代の水路によって失われている。路幅は側溝心々間では約4.4mである。方向は北側溝で測ると発掘基準線に対し西で約7度北に偏している。北側溝は上幅71cm以上、下幅21～31cm、深さは25～28cmである。断面形は逆台形を呈している。埋土は多量の炭化物、焼土粒を含む黒色粘質土である。南側溝は上幅1.7m以上、下幅44～70cm、深さは29～34cmである。底面はほぼ平坦で、壁は比較的緩やかに立ち上がっている。なお、西壁付近では、溝の底面より深さ25cmほどの窪みが認められた。埋土は多量の土器片、炭化物を含む黒色粘質土である。遺物は、両側溝より土師器杯（B II・B II c・B V類）・高台付杯・甕（A・B類）・鉢・甕、須恵器杯（III・V類）・蓋・甕・瓶、須恵系土器杯・高台付皿、灰釉陶器椀、製塙土器、丸瓦（II A類）・平瓦（I A・II B類）、竈形土器、風字硯、砥石が出土している。



第2図 S X3140 (D・E期) 道路跡ほか平面図



第3図 S X3140 (C期) 道路跡ほか平面図



第4図 SX3140 (A・B期) 道路跡平面図

#### S D3081溝跡

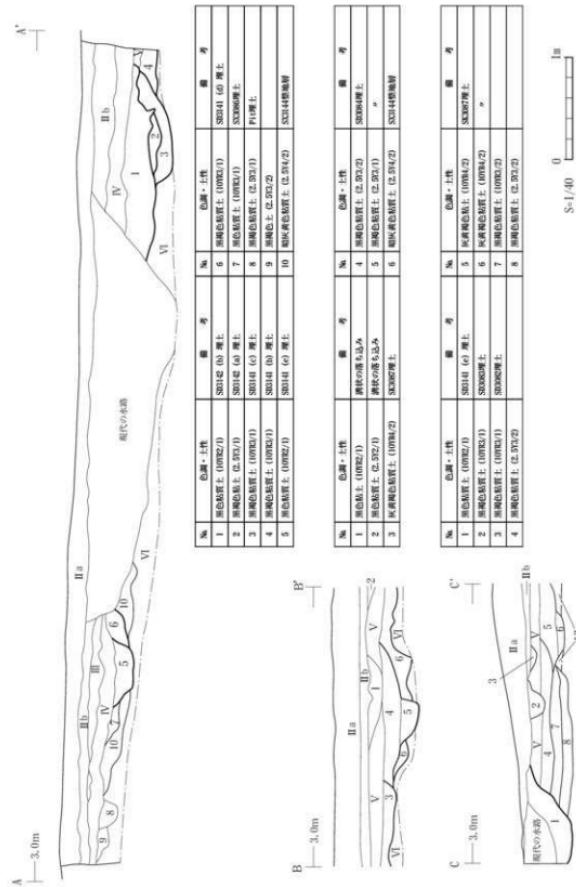
調査区北半部のIV層上面で発見した東西方向の溝跡である。確認できた長さは1.84m、規模は上幅17~26cm、下幅7~12cm、深さは3~4cmである。溝の方向は東で約6度南に偏している。溝の断面形はU字状を呈する。埋土は焼土粒、炭化物を少量含む黒褐色粘質土である。遺物は土師器杯(BV類)・甕(B類)、須恵器杯(III・V類)、竈形土器が出土している。

#### S D3082溝跡

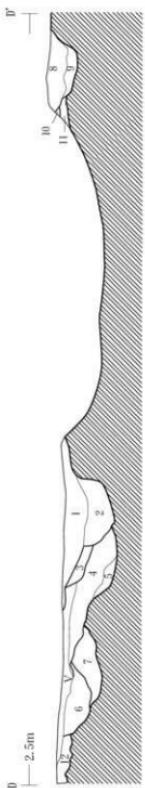
調査区北半部のIV層上面で発見した東西方向の溝跡である。確認できた長さは1.92m、規模は上幅13~18cm、下幅3~8cm、深さは3~6cmである。溝の方向は東で約12度南に偏している。溝の断面形はU字状を呈する。埋土は、炭化物を少量含む黒褐色粘質土である。遺物は土師器杯(BV類)・甕(B類)、須恵器杯が出土している。

#### S D3083溝跡

調査区北半部のIV層上面で発見した東西方向の溝跡である。確認できた長さは約4.1m、規模は上幅17~28cm、下幅7~17cm、深さは7~12cmである。溝の方向は東で約6度南に偏している。溝の断面形はU字状を呈し、底面は概ね平坦である。埋土は、炭化物を少量含む黒褐色粘質土である。遺物は出土していない。

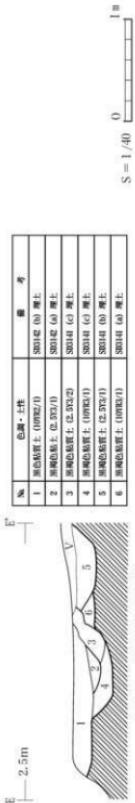


第5図 調査区断面図



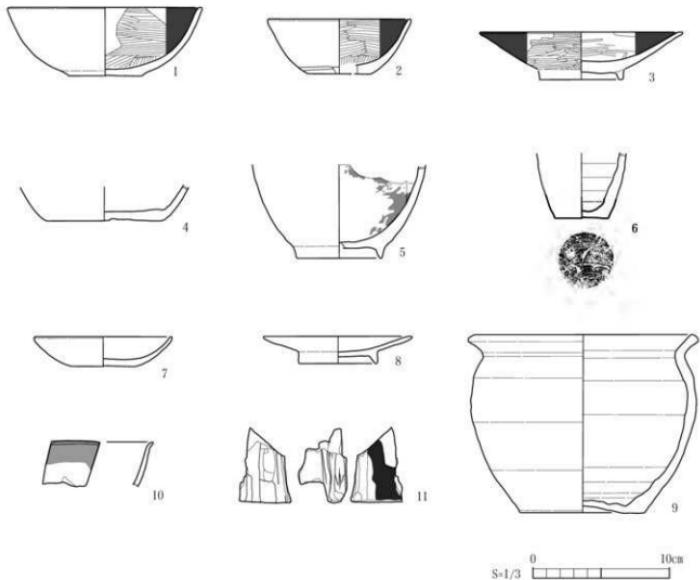
SX3140南1道路断面图

%	层 号	%	层 号	%	层 号
1	黑色带土 (0.072/1)	S3141 (b) 带土:	7	黑色带黄土 (0.072/1)	S3141 (a) 带土:
2	黑色带土 (0.372/1)	S3141 (b) 带土:	8	黑色带黄土 (0.072/1)	S3141 (c) 带土:
3	黑色带土 (0.372/1)	S3141 (c) 带土:	9	黑色带土 (0.072/1)	S3141 (d) 带土:
4	黑色带黄土 (0.372/2)	S3141 (d) 带土:	10	黑色带黄土 (0.072/1)	S3141 (e) 带土:
5	黑色带黄土 (0.072/1)	S3141 (e) 带土:	11	黑色带黄土 (0.572/2)	S3141 (f) 带土:
6	黑色带黄土 (0.372/1)	S3141 (f) 带土:	12	黑色带黄土 (2.294/1)	S3141 (g) 带土:



S3141-3142断面图

第6图 SX3140南1道路·S D3141-3142断面图

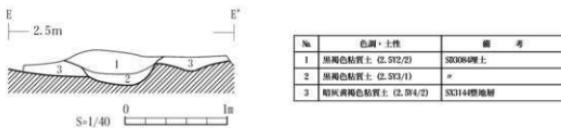


番号	種類	遺物・部位	特徴		口 径 現存寸	底 径 現存寸	高 さ 現存寸	写 真 番 号	登 録 番 号	備 考
			外 面	内 面						
1	土器器	杯	SBD142b・埋土	ロクロナデ	ロクロナデ (14.4) 1/24	ロクロナデ (3.4) 19/24	5.1		R41	BV類
2	土器器	杯	SBD142b・埋土	ロクロナデ 底部：持ちこちケズリ	ロクロナデ (10.6) 6/24	ロクロナデ (4.6) 6/24	4.1		R87	BIIc類
3	土器器	高台付杯	SBD142b・埋土	ロクロナデ ヘミガタ・黒色地附	ロクロナデ (15.0) 1/24	ロクロナデ (6.4) 24/24			R42	
4	須恵器	杯	SBD141c・埋土	ロクロナデ 底部：回転へつ切り	ロクロナデ				R3	田製
5	須恵器	長瓶瓶	SBD142b・埋土	ロクロナデ	ロクロナデ				R5	内側付青物あり
6	須恵器	長瓶瓶	SBD142b・埋土	ロクロナデ 底部：紡玉糸切り	ロクロナデ				R6	平均容分量「壺G」
7	須恵器	土器	SBD142b・埋土	ロクロナデ	ロクロナデ (10.2) 4/24	ロクロナデ (4.7) 24/24	2.2		R17	
8	須恵器	高台付瓶	SBD142b・埋土	ロクロナデ	ロクロナデ (11.0) 8/24	ロクロナデ (5.8) 12/24	2		R16	
9	土器器	盤	SBD141c・埋土	ロクロナデ	ロクロナデ (11.0) 8/24	ロクロナデ (0.2) 20/24	13.2	I-1	R1	B類
10	灰陶胸器	胸	SBD141e・埋土	ロクロナデ	ロクロナデ			I-2	R10	
11	漢字鏡		SBD142b・埋土						R7	墨感あり

第7図 S D3141溝跡ほか出土遺物

### S D3084溝跡

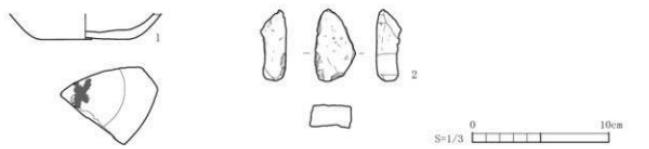
調査区北半部のS X3144整地層上面で発見した南北方向の溝跡である。S K3087と重複し、それより古い。確認できた長さは約2.8m、規模は上幅0.8~1.17m、下幅35~38cm、深さは19~21cmである。方向は北で約18度東に偏している。断面形は逆台形を呈し、底面は概ね平坦である。埋土は2層に区分される。黒褐色粘質土を主体とし、上層は少量の炭化物と多量のにぶい黄色粘質土、下層には多量のにぶい黄色粘質土を含んでいる。遺物は出土していない。



第8図 S D3084溝跡断面図

### S X3086

調査区東部のS X3144整地層上面で発見した浅い窪みである。平面形は南北に細長い不整形を呈し、深さは3~7cmである。埋土は炭化物、にぶい黄色粘質土粒を少量含む黒褐色粘質土である。遺物は土師器杯・甕（B類）、須恵器杯（III類）（第9図1）・甕・瓶、丸瓦（II B類）、砥石（第9図2）が出土している。



番号	種類	遺物・部位	特徴		口径 残存率	底 径 残存率	壁 高	資料番号	備考	単位：cm
			外 面	内 面						
1	須恵器・杯	SX3086・埋土	ロクロナギ 底部：斜面へラ切り	ロクロナギ	(6.4) 7/24			R9	底部に「X」字状に付着物 Ⅲ類	
2	砥石	SX3086・埋土	長さ：5.3 幅：3.0 厚さ：1.8 重さ：30.9g					R21		

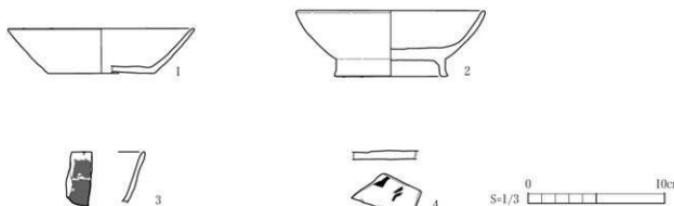
第9図 S X3086出土遺物

### S K3087土壤

調査区北西隅で発見した土壤である。S D3084と重複し、それより新しい。平面形は東西に長い不整形を呈し、規模は東西1.0m以上、南北0.96m以上、深さは9~11cmである。底面には凹凸があり、壁は緩やかに立ち上がる。埋土は2層に区分される。いずれも灰黃褐色土を主体とし、上層は少量の炭化物と地山粒、下層には多量の地山粒を含んでいる。遺物は土師器甕（B類）が出土している。

(3) 堆積層出土遺物

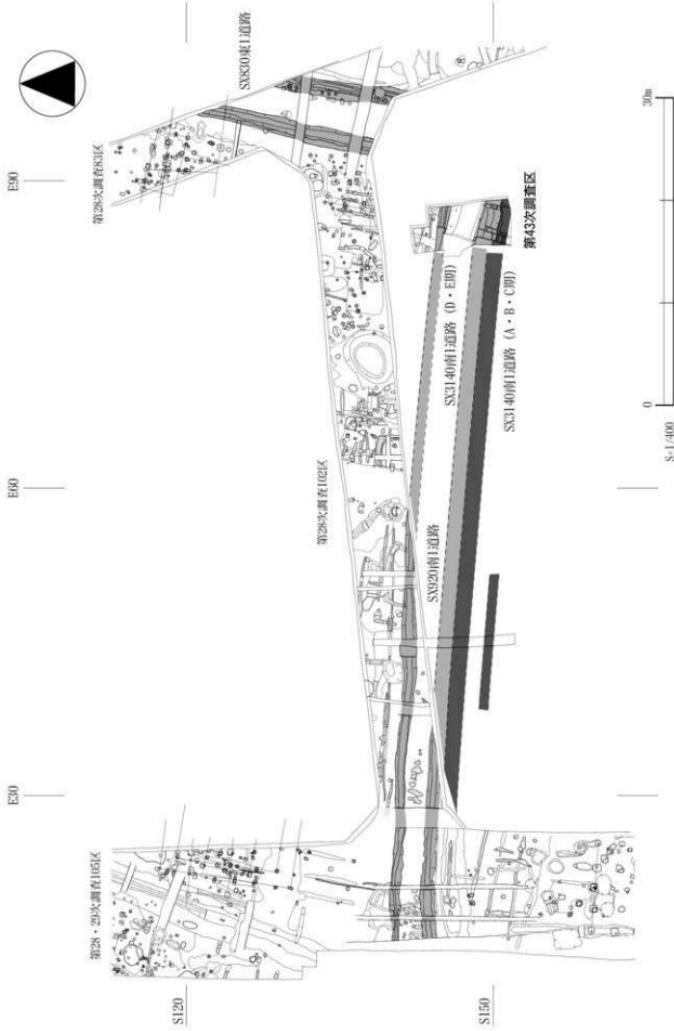
堆積層からは土師器杯（B II・B V類）・高台付杯・甕（A・B類）・須恵器杯（I・II・III・V類）・高台付杯・甕・瓶、須恵系土器杯・高台付皿、製塙土器、平瓦、竈形土器、砥石が出土している。



番号	種類	遺物・部位	特徴		口径 残存率	底径 残存率	器高	登録番号	備考
			外 面	内 面					
1	須恵器・杯	V型	ロクロナデ 底部：回転へき切り	ロクロナデ	(13.8) 7/24	(6.9) 14/28	3.3	R2	墨痕
2	須恵器 高台付杯	V型	ロクロナデ 底部：回転へき切り	ロクロナデ	(14.0) 5/24	(6.4) 18/28	4.9	R4	
3	須恵器・杯	V型	ロクロナデ	ロクロナデ				R10	内面に漆付着
4	須恵器・杯	皿型	ロクロナデ 底部：回転へき切り	ロクロナデ				R15	底部外縁「□」墨痕 墨痕

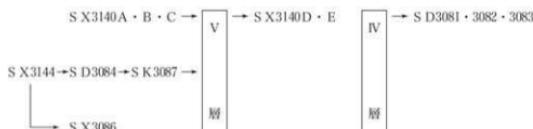
第10図 堆積層出土遺物

第11図 S×920・3140南1道路模式図



### 3.まとめ

今回の調査ではS X3140（A～E期）南1東西道路跡、溝跡4条、土壙1基、整地他を確認した。これらの遺構を堆積層との関係から見ると、以下のとおりである。



V層を鍵層として、これより下層で検出した遺構と、上層で検出した遺構とに大きく2分することができる。V層については、第28次調査で確認されたS X920A～C期を覆っているⅢb層に対応するもので、灰白色火山灰降下以降に形成された土層とされている。このことは、本調査でもV層に覆われるS D3141cに灰白色火山灰が含まれていることと整合する。

道路跡の年代については、S D3141cは埋土中に10世紀前葉に降下した灰白色火山灰ブロックを含むことからその前後の時期、S D3141a・bは降下以前、S D3141d・e、S D3142a・bは降下以降となる。また、後者については出土遺物から見ると、10世紀前葉に出現するとされる須恵系土器も出土している。これは灰白色火山灰との関係からも矛盾しない。これに対しS D3141a・bでは、土師器杯B類・甕B類が主体で、須恵系土器を全く含んでいないことから、概ね9世紀代に収まるものと見られる。

以上のことから、S X3140A～Eとこれに伴う両側溝（北側溝S D3141a～e、南側溝S D3142a・b）について、第28次調査成果と対応させると第1表のようになる。なお、S X3140A～C期の北側溝については、D・E期の4～5m南側に位置している。したがって、この時期の南側溝については、本調査区外にあると推定される。

	S X920（第28次調査）		S X3140（第43次調査）	
	北側溝	南側溝	北側溝	南側溝
A期	S D922a	S D921a	S D3141a	—
B期	S D922b	S D921b	S D3141b	—
C期	S D922c	S D921c	S D3141c	—
D期	S D922d	S D921d	S D3141d	S D3142a
E期	S D922e	S D921e	S D3141e	S D3142b

第1表 S X920・3140南1道路側溝対応表

#### 【参考文献】

- 白鳥良一「多賀城跡出土土器の変遷」『研究紀要VII』宮城県多賀城跡調査研究所 1980  
 白鳥良一「多賀城跡 政府論本文編 第V章 考察②」宮城県多賀城跡調査研究所 1982  
 宮城県多賀城跡調査研究所「第60・61次調査」『宮城県多賀城跡調査研究年報1991』 1992  
 多賀城市教育委員会「市川橋遺跡一城南土地区画整理事業に係る発掘調査報告書III』多賀城市文化財調査報告書第75集 2004



調査区全景 西より



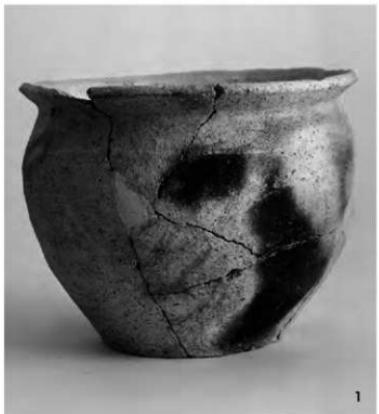
調査区全景 東より



S X3140南1道路 東壁断面 西より

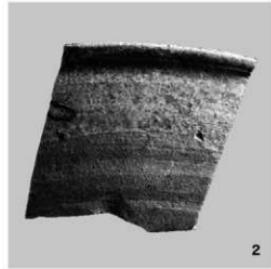


S D3084溝跡 南より



1

1 土師器・甕 (第7図9 R1)  
2 灰釉陶器・椀 (第7図10 R10)



2

写真図版 1

## XI. 山王遺跡第41次調査

### 1. 調査に至る経緯と経過

本調査は、おける個人住宅建設に伴う発掘調査である。平成14年11月、施工業者から当該区の住宅建築に際し、現表土から1.3mの深さで表層改良を行いたい旨の打診を受け、埋蔵文化財に関する協議を開始する。協議では、当該区周辺では、現表土から1~1.2mの深さで古代の遺構面が確認されていることや、東側近接地に国守館跡があり遺構が密集する地区であることから、発掘調査が必要である旨説明を行い、調査について概ね了解を得た。ただし、掘削する深度と遺構検出面の推定深度が近似していることから、事前に確認調査を行い、遺構面を傷つける場合にのみ本発掘調査を実施することとなった。平成15年4月24日、遺構面までの深さを測るために重機により一部掘削を実施した結果、現表土から0.8mの深さで遺構面を確認した。そのため、直ちに本発掘調査に移行する準備に取りかかる。5月1日、地権者より埋蔵文化財包蔵地に係る発掘調査についての依頼を受け、5月19日より本発掘調査を実施した。

調査は、住宅建設部分の表土除去から入ったが、土砂置き場の関係で、対象面積の1/3の表土除去に止まった。同日午後より遺構の検出作業を行い、検出状況の写真撮影を行う。その際、調査区中央部で検出した南北方向の溝跡が、西8南北道路の東側溝であることが判明する。翌日、調査区内に土層観察と排水用の側溝を兼ねたサブトレーンチを設定し、調査区内の土層堆積状況を確認する。その結果、今回検出した遺構については、IV・V層上面で検出されることを確認した。5月22日より、遺構埋土の掘り込みを開始するとともに、調査区内に実測基準点を設置し、随時平面図・断面図の作成を行う。なお、西8南北道路東側溝については、断面観察により、数時期の変遷があることを確認していたが、平面的な調査の結果、8時期の変遷があることが明らかとなった。30日、調査区の全景写真撮影を行い、終了後、北壁付近の深掘り調査を実施する。その結果、IV層下層で、南北方向の河川の堆積を確認した。6月3日、平面図・断面図の確認を行った後、重機による調査区の埋め戻しを行う。午後、器材を撤収し、一切の調査を終了した。

### 2. 調査成果

#### (1) 基本層序

今回の調査で確認した基本層序は、以下のとおりである。



第1図 調査区位置図

- I層：現代の盛土で、層厚は16～30cm。
- II層：炭化物が僅かに混入する灰黄褐色シルト（10YR4/2）で、層厚は35～50cm。
- III層：にぶい黄橙色シルト（10YR6/3）が多量に混入する暗褐色シルト（10YR3/3）で、層厚は10～25cm。  
調査区西側に向かってやや厚く堆積している。古代の遺物が若干含まれる。
- IV層：にぶい黄橙色シルト（10YR6/3）で、層厚は10～20cm。調査区中央に向かってやや厚く堆積している。  
古代の遺構検出面。
- V層：灰黄褐色砂（10YR5/2）で、層厚は80cm以上。本調査区中央を南北方向に流れていた旧河川埋土と考えられる。
- VI層：黒色粘土（10YR2/1）で、層厚は約10cm。
- VII層：灰黄褐色粘質土（10YR6/2）で、層厚は約5cm。
- VIII層：黒色粘土（10YR2/1）で、層厚は約5cm。

## （2）発見遺構と遺物

### S X1056西8南北道路

調査区中央から西半部で発見した南北道路跡である。南北大路から約1,000m西に位置しており、城外の方格地割りのうち、西8南北道路に相当する。長さは約5.6m検出し、南北とも調査区外に延びている。東西両側に素堀の側溝（東側溝：S D1057、西側溝：S D1058）を伴っており、東側溝で8時期の変遷（a→h期）を確認した（註）。S D1058については、大部分が調査区外にあるため変遷等の詳細は明らかでないが、埋土や形態等からS D1057hと同時期であると判断した。道路の規模は、最も新しいS D1057hとS D1058の心々間で4.1m、路幅は2.2mである。以下、東西両側溝ごとに説明する。

#### S D1057東側溝

**a期：**最も古い段階の側溝である。上面及び南半部はb期以降の側溝に大きく壊されている。方向は北で約3度東に偏している。規模は、上幅0.58～0.9m、下幅0.35～0.6m、深さ0.3mである。断面形は概ねU字型であり、壁は緩やかに立ち上がっている。底面は、北側から南側に向かって緩やかに傾斜しており、比高は9cmである。埋土は、黑褐色粘土（10YR3/1）が小ブロック状に多量に混入するにぶい黄橙色砂質土（10YR6/4）である。遺物は、土師器杯（B II c・B V類）・甕（A・B類）、須恵器杯・甕、丸瓦、平瓦（II B・II C類）がある。

**b期：**a期とほぼ同位置で造り替えられている。東半部はg期に大きく壊されている。方向は概ね発掘基準線と一致する。規模は、上幅1m以上、深さ0.4～0.46mである。断面形は概ね逆台形状であるが、北壁付近でのみU字型を呈している。底面は概ね平坦であり、比高はほとんどない。埋土は2層に細分できる。上層は炭化物やにぶい黄橙色砂質土（10YR6/4）が斑状に混入するにぶい黄褐色シルト（10YR4/3）、下層は炭化物や褐灰色粘質土（10YR5/1）が僅かに混入するにぶい黄褐色砂質土（10YR5/3）である。遺物は、土師器杯・甕、須恵器杯があるが、いずれも小片である。

**c期：**IV層上面で検出した側溝であり、d期以降に大きく破壊されている。方向は、概ね発掘基準線と一致する。規模は、上幅0.5～0.75m、下幅0.3～0.45m、深さ0.25～0.4mである。断面形は緩やかなU字

（註）東側溝の変遷のうち、b期とc期、d期とe期については、直接的に新旧関係を確認することができなかった。しかし、各々の溝跡の配置や他の遺構との新旧関係から相対的に判断し、ここではa→h期の変遷であると理解した。

状であるが、北壁付近では中位に段を形成した後やや急に立ち上がっている。底面は北側から南側に向かって緩やかに傾斜しており、比高は9cmである。埋土は、黒褐色粘土（10YR3/1）が斑状及び筋状に多量に混入するにぶい黄橙色砂質土（10YR6/4）である。遺物は出土していない。

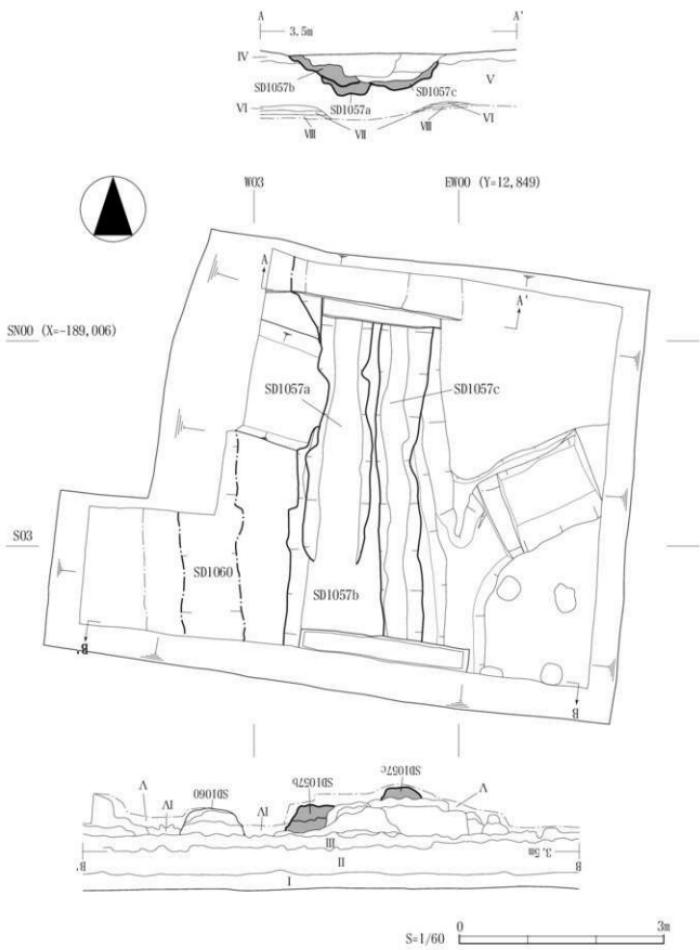
**d期**：c期とほぼ同位置で造り替えられている。方向は、北で約2度西に偏している。規模は、上幅0.8~1.1m、下幅0.62~0.78m、深さ0.12~0.2mである。断面形は概ね逆台形であるが、南端部では壁が垂直に立ち上がり、箱形を呈している。底面は北側から南側に向かって緩やかに傾斜しており、比高は5cmである。埋土は、にぶい黄橙色シルト（10YR6/4）や砂粒を多く含む黒褐色粘土（2.5Y3/2）であり、僅かではあるが灰白色火山灰の二次堆積が確認できる。遺物は、土師器杯（B V類）・甕（A・B類）・須恵器杯・甕・短頸壺、須惠系土器杯、平瓦（I C類）がある。

**e期**：最も東側で確認した溝である。調査区中央付近で、S D1059A東西溝と接続する。また、S B 1061と重複し、これよりも古い。規模は、上幅0.5m以上であり、検出面からの深さは約0.3mである。断面形は概ね逆台形を呈し、壁は急に立ち上がっている。底面は平坦であり、比高はない。埋土は2層に細分することができる。上層は、にぶい黄橙色シルト（10YR6/4）が斑状に多量に混入する褐灰色粘土（10YR4/1）、下層は黒褐色粘土（10YR3/1）が斑状に多量に混入する灰黃褐色シルト（10YR4/2）である。遺物は出土していない。

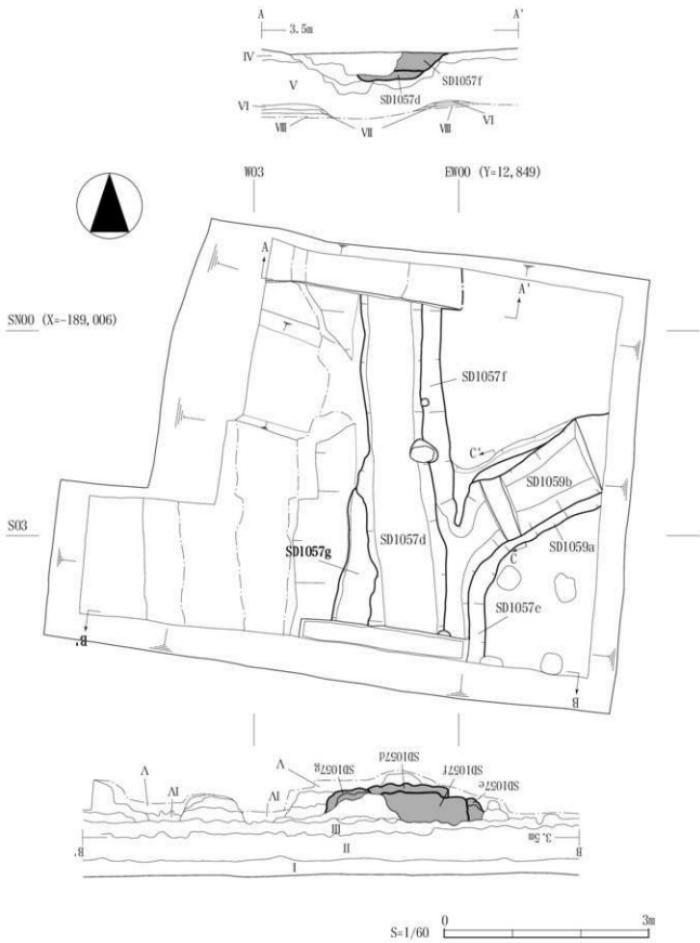
**f期**：e期をやや西側に移動して造り替えられている。西側が最も新しいh期に破壊されており、調査区中央付近では、S D1059B東西溝と接続している。方向は、北で約4度西に偏している。規模は、上幅1.2m以上、深さ0.27~0.43mである。断面形は概ね逆台形であるが、南端部では壁が垂直に立ち上がり、箱形を呈している。底面は北側から南側に向かって緩やかに傾斜しており、比高は8cmである。埋土は、炭化物が僅かに混入する黒褐色シルト（10YR3/2）である。遺物は、土師器杯（B II c・B V類）・甕（A・B類）、須恵器皿（III・V類）・甕・瓶、須惠系土器杯、丸瓦（II類）、平瓦（II b類）がある。

**g期**：b期東辺を壊して造られている。上面及び北半部はh期に大きく壊されている。方向は北で約2度東に偏している。規模は、上幅0.34~0.72m、下幅0.33~0.47m、深さ0.37mである。断面形はU字状であり、壁は東側が緩やかなのにに対し、西側は垂直気味に立ち上がっている。底面はやや凹凸が認められるが、比高差はほとんどない。埋土は2層に細分できる。上層は炭化物が多量に混入する黒色粘土（10YR2/1）、下層は灰白色火山灰やにぶい黄橙色シルト（10YR6/4）が斑状に混入する灰黃褐色シルト（10YR4/2）である。出土遺物は、土師器杯（B V類）・甕（B類）、須恵器皿（III類）・高台付杯・甕・瓶、灰釉陶器、製塙土器がある。

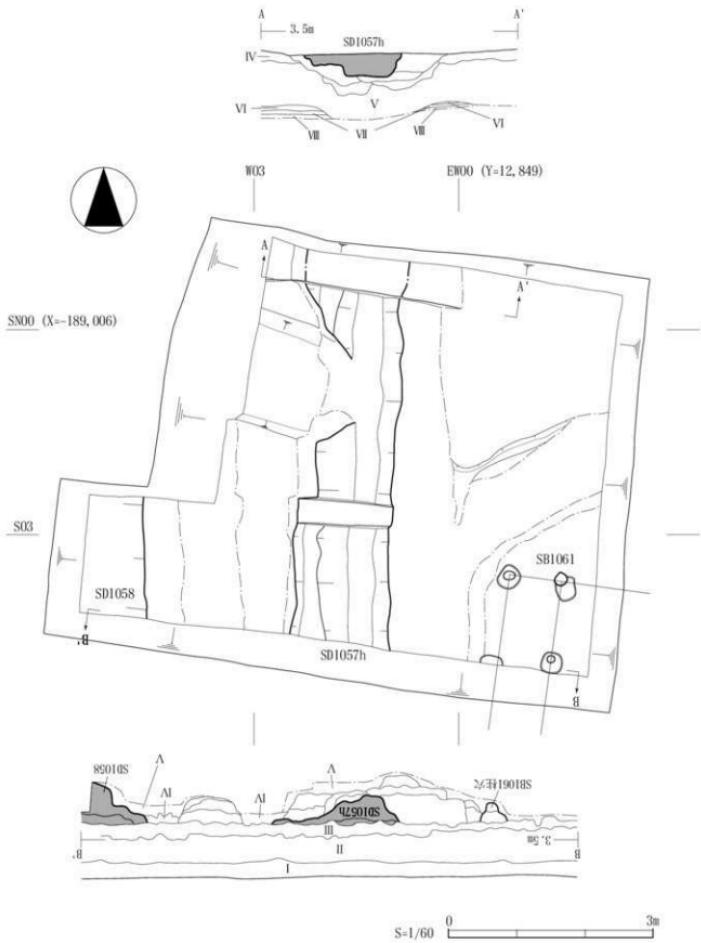
**h期**：g期とほぼ同位置で造られている。長さ約5.6m検出した。方向は北で約3度東に偏している。規模は上幅1.35~1.5m、下幅0.3~0.45m、検出面からの深さは0.4mである。底面は平坦であり、南北両端の比高差もほとんどない。壁は、東側が急な立ち上がりを示すのに対し、西側は底面から20cmの高さで幅20~30cmの平坦面を形成し、上方は検出面まで緩やかに立ち上がっている。埋土は2層に細分することができる。上層は黒色粘土（10YR2/1）であり、南端部でわずかに確認することができる。下層は、灰白色火山灰が粒状に二次堆積する黒褐色シルト（10YR3/1）である。遺物は、土師器杯（B II c・B V類）・甕（A・B類）、須恵器皿（III・V類）・高台付杯・瓶・甕、須惠系土器杯、灰釉陶器碗、平瓦（II B類）、丸瓦（II B類）、製塙土器、砾石、銭貨がある。



第2図 SD1057a・b・cほか平面図・断面図



第3図 SD1057d・e・f・gほか平面図・断面図



第4図 SD1057hほか平面図・断面図

#### S D1058西側溝

調査区西端部のIV層上面で発見した側溝であり、長さ約1.8mを検出した。規模は、上幅0.9m以上、深さ0.6m以上である。壁は、底面から35cmの高さで幅20cmの平坦面を形成し、その上方は検出面まで緩やかに立ち上がっている。埋土は2層に細分することができる。上層は黒色粘土層(10YR2/1)であり、炭化物が多量に混入している。下層は、灰白色火山灰が粒状に二次堆積する黒褐色シルト(10YR3/1)である。遺物は出土していない。

#### S B1061掘立柱建物跡

調査区南東隅のIV層上面で発見した南北1間以上、東西1間以上の掘立柱建物跡である。柱穴の配置から、総柱あるいは西側または北側に庇の付く建物の可能性があるが、北西隅を検出したに止まるため明らかでない。S D1057 f期と重複し、それよりも新しい。柱穴は4基検出しており、北西隅と北側から1間目・西側から1間目柱穴で柱痕跡を確認した。方向は西側から1間目柱列でみると、北で約7度東に偏している。柱間は、北側柱列で約0.7m、西側柱列で約1.2mである。柱穴の平面形は概ね方形を基準としており、規模は長辺30~40cm、短辺30cmである。埋土は、褐灰色シルト(10YR4/1)が斑状に多く混入するにぶい黄橙色シルト(10YR6/4)である。柱痕跡は直径12~15cmの円形である。遺物は出土していない。

#### S D1059溝跡

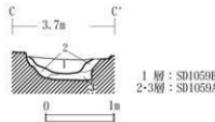
調査区東半部で発見した東西方向の溝であり、同位置で2時期の変遷(A→B)がある。西端部で、SD1057西8道路東側溝と接続しており、SD1059AとSD1057e、SD1059BとSD1057fが同時期のものであることを確認した。

**S D1059A溝跡**: IV層上面で発見した。規模は、上幅1.2m、下幅0.7~0.75m、深さ0.38~0.46mである。断面形は概ね逆台形である。壁は、北側は急な立ち上がりを示すが、南側はやや緩やかである。底面概ね平坦であり、比高差もほとんどない。また、SD1057fの底面と比較すると、約10cm低く掘り込まれている。埋土は、2層に細分することができるが、いずれもにぶい黄橙色砂質土(10YR6/4)が混入する褐灰色粘土質土(10YR4/1)である。遺物は出土していない。

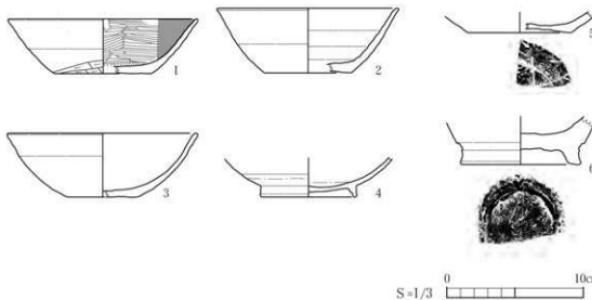
**S D1059B溝跡**: A期をほぼ同位置で造り替えている。規模は、上幅0.9~1.1m、下幅0.45~0.63m、深さ0.33mである。断面形は皿状を呈し、壁は緩やかに立ち上がっている。底面概ね平坦であり、比高差もほとんどない。また、SD1057fの底面と比較すると、5~10cm低く掘り込まれている。埋土は、炭化物が僅かに混入する黒褐色土(10YR3/2)である。遺物は、土師器杯(B II c・B V類)・甕(A・B類)・瓶、須恵器杯(II・III・V類)・甕・瓶、丸瓦(I A・II類)が出土している。

#### S D1060溝跡

調査区西半部のIV層上面で発見した溝であり、長さ約3mを検出した。SX1056西8道路の路面上に位置しているが、SD1057東側溝と平行していることから、道路側溝である可能性が高い。方向は、北で約13度西に偏する。規模は、上幅0.8~0.95m、深さ0.4mである。断面形はU字状であり、壁は急に立ち上がっている。埋土は3層に細分することができる。1・2層は黒褐色粘土(10YR3/1)が小ブロック状に多量に混入するにぶい黄褐色土(10YR5/4)、3層は黒褐色粘土(10YR3/1)が小ブロック状に混入する灰黄褐



第5図 SD1059A・B断面図



番号	種類	遺物・解説	特徴		口径 保存率	底径 保存率	器高	登番 記号	備考
			外面	内面					
1	土師器・杯	SBH057g・I期 削り	ロクロナデ、底部：手持ちヘラ カケリ	ヘラミガキ、黒色施用	(13.8) 6/34	(7.0) 12/24	4.0	R5	
2	須恵器・杯	SBH057g・I期	ロクロナデ		(13.2) 2/34	(6.4) 6/24	4.7	R3	
3	須恵形土器・杯	SBH057g・I期	ロクロナデ、底部：回転系切 り	ロクロナデ	(13.8) 6/34	5.0	4.7	R6	
4	灰陶陶器・碗	SBH057h・I期	ロクロナデ	回転ヘラケズリ		(6.8) 6/24		R1	K90黒火
5	須恵器・杯	SBH057h・I期	ロクロナデ、底部：回転系切 り	ロクロナデ		(7.6) 6/24		R4	底部ヘラガキ
6	須恵器・瓶	SBH059B	ロクロナデ	ロクロナデ		(8.6) 5/24		R2	底部ヘラガキ

第6図 出土遺物

色粘土 (10YR5/2) である。遺物は出土していない。

### 3.まとめ

今回の調査では西8南北道路を初めて発見し、東側溝で8時期 (S D1057 a → h) の変遷を確認した。年代についてみると、S D1057 d に10世紀前葉に降下した灰白色火山灰が二次堆積していることから、d ~ h期については、それ以降であることが明らかである。出土遺物を見ても、10世紀前後に出現するとされる須恵系土器が、S D1057 d 以降に認められることから、灰白色火山灰との関係とも矛盾しない。一方、a ~ c期について

は、S D1057 a に土師器杯B V類・甕B類が含まれることや、須恵系土器が全く出土していないことから、

東側溝	西側溝	その他関連遺構	年代
S D1057 a期	—		9世紀
〃 b期	—		
〃 c期	—		
〃 d期	—		
〃 e期	—	東側溝に S D1059A接続	10世紀前葉 以降
〃 f期	—	東側溝に S D1059B接続	
〃 g期	—		
〃 h期	S D1058		

第1表 東西側溝対応表

概ね9世紀代に収まるものと考えられる。なお、西側溝との対応関係については、調査区の制限より最も新しい段階のもの以外は明らかにすることができなかった。

S B1061建物跡は、S D1057fよりも新しいことから、10世紀前葉以降である。

S D1059A・B溝跡については、それぞれS D1059e・fと接続していることから、共に10世紀前葉以降である。なお、S D1059溝跡は、位置的に東西大路と北1道路のほぼ中間にあたると推定されることがら（第1図）、地割り内を区画する溝である可能性が高い。

【参考文献】

宮城県多賀城跡調査研究所 「第60・61次調査」『宮城県多賀城跡調査研究所年報1991』1992  
白鳥良一 「多賀城跡出土土器の変遷」『研究紀要V』宮城県多賀城跡調査研究所 1980



S D1057西8道路東側溝 北より



S D1057西8道路東側溝断面 北壁側

写真図版1

## XII. 山王遺跡第42次調査

### 1. 調査に至る経緯と経過

本調査は、個人住宅建設に伴って実施したものである。今回の建設工事は、住宅建築部分の現地表下約1.5mまで掘り下げ、セメントと土を攪拌させる地盤改良を行うものであった。周辺の調査成果から、現地表面から遺構検出面まで80cm前後の深さであるため、地下遺構に影響を与えることが考えられた。そのため発掘調査の実施の協力を地権者に求め、平成15年7月9日に発掘調査の依頼を受けて本発掘調査に至ったものである。

調査は平成15年8月25日より着手し、はじめに重機によって盛土除去作業を行った。翌日から遺構検出作業を行い、溝跡、土壤、柱穴を発見した。9月3日には平面図作成のための基準点を設定した。検出した遺構は重複関係を確認後、埋土の掘り下げを行い、終了した遺構については随時写真撮影、平面図・断面図を作成した。11日に全景写真撮影を行った後、下層遺構の確認をするために一部掘り下げたが発見できなかった。12日には埋戻し作業後、発掘器材を撤収し全ての調査を終了した。

### 2. 調査成果

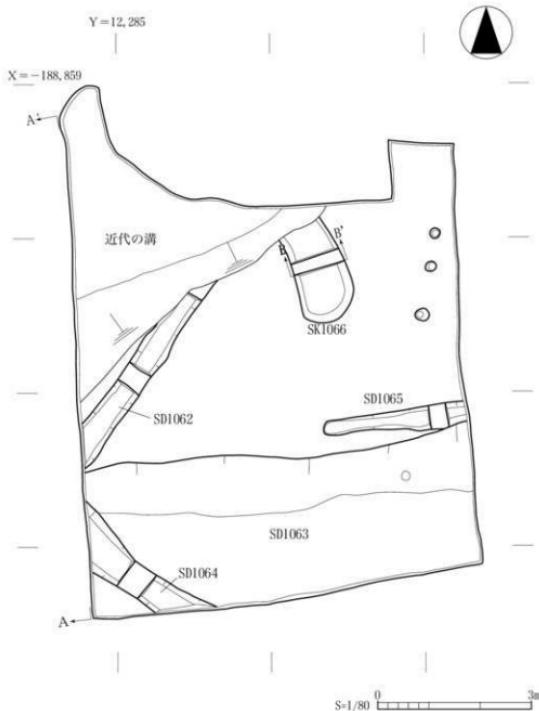
#### (1) 基本層序

今回の調査で確認できた層序は以下のとおりである。

- I層：現代の盛土で、厚さ約1m。
- II層：オリーブ黒褐色砂質土（5Y3/1）で、調査区南西部に分布する。層厚は3～12cm。
- III層：黒褐色砂質土（2.5Y3/1）で、調査区南西部に分布する。層厚は4～24cm。
- IV層：暗褐色砂質土（10YR3/3）で、溝跡、土壤の検出面。
- V層：黒色砂質土（7.5YR2/1）で、層厚は8～13cm。
- VI層：オリーブ黒色砂質土（5Y3/2）で、層厚は8～10cm。
- VII層：オリーブ黒色粘質土（5Y3/2）で、層厚は14～20cm。
- VIII層：灰色粘土（10Y4/1）で、層厚は35cm以上。



第1図 調査区位置図



第2図 遺構平面図

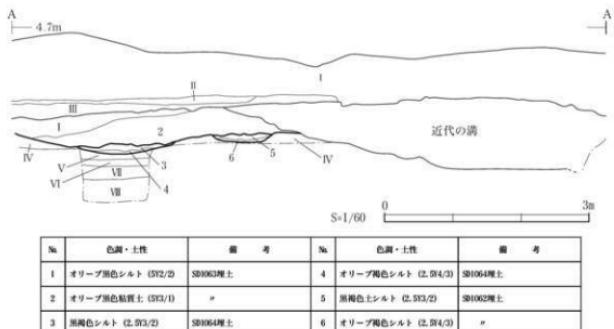
## (2) 発見遺構と遺物

### SD1062溝跡

調査区西半部のIV層上面で発見した溝跡である。方向は北で約37度東に偏している。確認できた長さは約5.3mで、規模は上幅45～58cm、下幅25～40cm、深さは7～12cmである。埋土は2層に区分される。上層は酸化鉄を含む黒褐色シルト、下層はオリーブ褐色シルトである。遺物は出土していない。

### SD1063溝跡

調査区南半部のIV層上面で発見した東西方向の溝跡である。SD1064・1065と重複しこれらより新しい。方向はほぼ発掘基準線に一致している。確認できた長さは約7.5m、西壁を参考にすると深さは40～50cm



第3図 西壁断面図

である。埋土は2層に区分される。上層は炭化物をわずかに含むオリーブ黒色シルト、下層は酸化鉄を含むオリーブ黒色土である。遺物は出土していない。

#### S D1064溝跡

調査区南西部で発見した溝跡である。S D1063と重複しそれより古い。方向は北で約27度西に偏している。確認できた長さは約4.2mで、規模は上幅60～80cm、下幅40～50cm、深さは西壁では6～15cmである。埋土は2層に区分される。上層は酸化鉄を含む黒褐色シルト、下層はオリーブ褐色シルトある。遺物は出土していない。

#### S D1065溝跡

調査区東側のIV層で発見した東西方向の溝跡である。S D1063と重複しそれより古い。方向は西で約7度南に偏している。確認できた長さは約2.8mで、上幅25～46cm、下幅21cm、深さは36cmである。壁は垂直気味に立ち上がり、底面は平坦である。埋土は2層に区分される。上層は酸化鉄粒を含む黒褐色シルト (2.5Y3/3)、下層は酸化鉄と炭化物を含んだ灰黄褐色土 (10YR4/2) である。遺物は出土していない。

#### S K1066土壤

調査区北側のIV層で発見した南北に長い土壙である。規模は長辺約1.9m以上、短辺1.05m、深さは13cmである。壁の断面形は、逆台形で底面は平坦である。埋土は酸化鉄を含む灰黄褐色シルトである。遺物は出土していない。



第4図 S K1066土壤断面図

### 3.まとめ

今回の調査では、溝跡4条、土壌1基を発見した。このうちS D1062・1064については、埋土や規模が類似していることから「く」字状を呈する一連の溝跡の可能性がある。これらの遺構の年代については、重複関係から近代の溝（註）より古いと言えるが、出土遺物もないため詳細は不明である。

（註）この溝からは陶器鉢・桶鉢が出土しており、これらの年代については、19世紀からそれ以降のものである。



写真図版1 調査区全景 南東より

### XIII. 山王遺跡第43次調査

#### 1. 調査に至る経緯と経過

本調査は、個人住宅建設に伴う発掘調査である。平成15年8月、地権者より当該区における住宅建築と埋蔵文化財のかかわりについての協議書が提出された。当該区周辺では、北及び東側の道路建設の際に本発掘調査を実施しており（平成7年度：第29次調査、平成8年度：第30次調査）、古墳時代の水田跡や中世の掘立柱建物跡等を発見している（註）。今回の建築計画では、基礎工事の際に、直径5m、長さ6.0mの杭基礎を打ち込むことから、これら地下遺構への影響が懸念された。このため、直ちに遺構の保存を前提とした協議を行ったが、基礎構造の強度を得るためにやむを得ないことから、本発掘調査を実施することに決定した。9月5日、地権者より埋蔵文化財保蔵地に係る発掘調査についての依頼を受け、10月6日より調査を開始した。

調査は、住宅建設部分の表土除去から入ったが、

土砂置き場の関係で、対象面積の半分の除去に止まった。同日午後より遺構の検出作業を行い、新しい遺構から埋土の掘り込みを開始する。また、調査区の周囲に土層観察と排水用の側溝を兼ねたサブトレチを設定し、調査区内の土層堆積状況を確認する。その結果、本調査区には、複数の遺構検出面があることが予想された。10月14日、調査区内に実測基準点を設置し、随時平面図・断面図の作成を行うとともに、下層遺構の検出に取りかかる。この際、サブトレチをさらに深く掘り下げたところ、最下層で確認していた黒色粘土層が、東側隣接地で実施した第30次調査区（平成8年）に於いて確認した古墳時代の水田面と一連のものである可能性が高くなった。10月20日、水田面及びS X1075畦畔を検出し、S X1075が30次調査で確認した畦畔の延長線上に位置することが明らかとなった。10月24日、平面図・断面図の確認と北東端部の補足調査を行った後、重機による調査区の埋め戻しを行った。午後、器材を撤収し、一切の調査を終了した。



第1図 調査区位置図

（註）北側に隣接する第29次調査では、掘立柱建物跡15棟をはじめ、井戸跡5基、溝跡5条など多くの遺構を発見している。これらの遺構は、出土した遺物や遺構の形状等から、概ね中世のものであると考えられる。一方、東側に隣接する30次調査では、古墳時代前期から江戸時代にかけて、4枚の遺構面を確認している。このうち最も下層（標高約4.7m）で発見した水田跡では、幅約2mの大畦畔とやや規模の小さい小畦畔で区画された9枚の水田区画を確認している。水田の年代は、出土した遺物の特徴から古墳時代前期と考えられる。

## 2. 調査成果

### (1) 基本層序

今回の調査で確認した基本層序は、以下のとおりである。

- I層：現代の盛土で、層厚は60～70cm。
- II層：にぶい黄褐色シルト（10YR4/3）で、層厚は10～20cm。
- III層：にぶい黄褐色砂質土（10YR5/3）が混入する黒褐色シルト（10YR3/2）で、層厚は10～20cm。
- IV層：にぶい黄褐色砂質土（10YR5/3）や炭化物が混入する暗褐色シルト（10YR3/3）で、層厚は8～20cm。
- V層：にぶい黄橙色粘質土（10YR6/4）や褐灰色シルト（10YR4/1）が斑状に多量に混入する黒褐色シルト（10YR3/2）で、層厚は10～15cm。中世の遺構検出面。
- VI層：褐灰色シルト（10YR4/1）や黒褐色粘土（10YR3/1）が斑状に混入するにぶい黄褐色シルト（10YR5/4）で、層厚は約5～10cm。古代の遺構検出面。
- VII層：にぶい黄橙色粘質土（10YR6/4）や黒褐色粘土（10YR3/1）が斑状に混入する灰黃褐色粘土（10YR4/2）で、層厚は10cm。調査区北半部にのみ堆積している。
- VIII層：褐灰色粘質土（10YR4/1）が斑状に混入するにぶい黄橙色粘質土（10YR6/4）で、層厚は5～10cm。
- IX層：浅黄色粘質土（2.5Y7/3）が混入する黒褐色粘土（10YR3/1）で、層厚は2～4cm。
- X層：浅黄色粘質土（2.5Y7/3）が混入する暗黃色粘土（10YR4/2）で、層厚は5～10cm。北半部にのみ堆積している。
- XI層：浅黄色粘質土（2.5Y7/3）が混入する黒色粘土（10YR2/1）で、層厚は2～10cm。北半部にのみ堆積している。
- XII層：砂粒が多量に混入する黒褐色粘質土（10YR3/1）で、層厚6～10cm。古墳時代の水田耕作土であり、底面の凹凸が著しい。
- XIII層：にぶい黄橙色砂（10YR6/4）。

### (2) 発見遺構と遺物

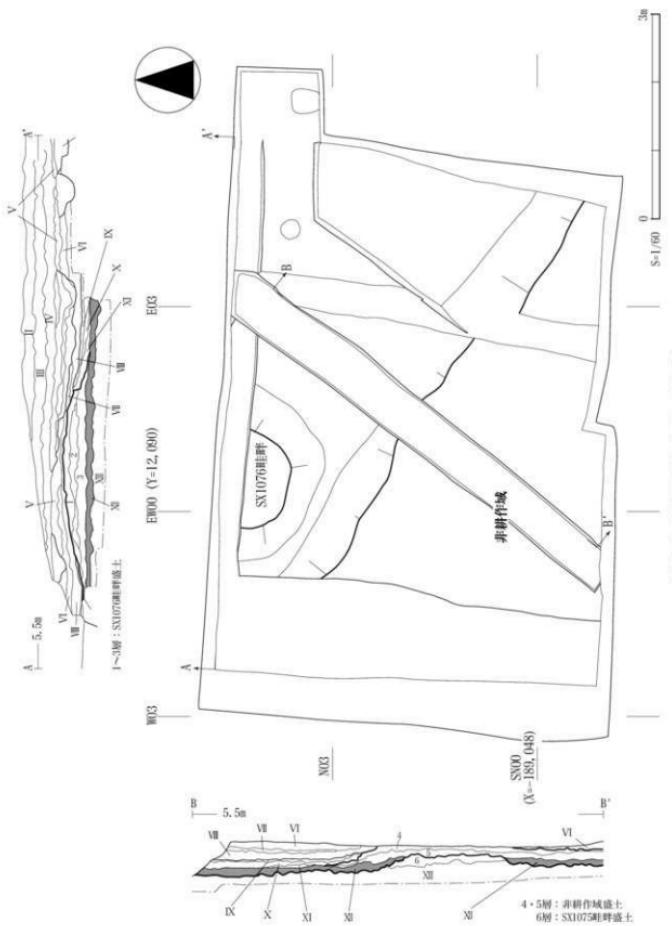
今回の調査ではIV・V層上面で溝跡・土壤、XII層で水田跡を発見した。以下、層序ごとに発見した遺構について記載する。

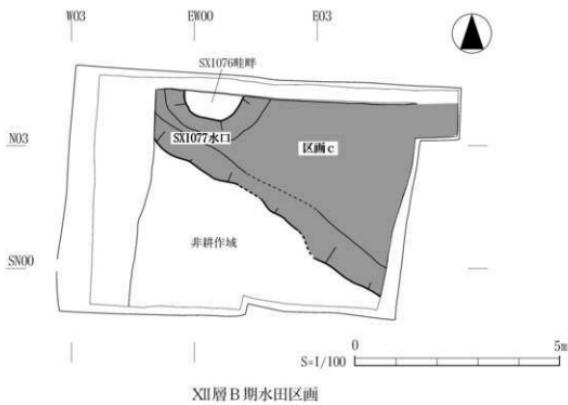
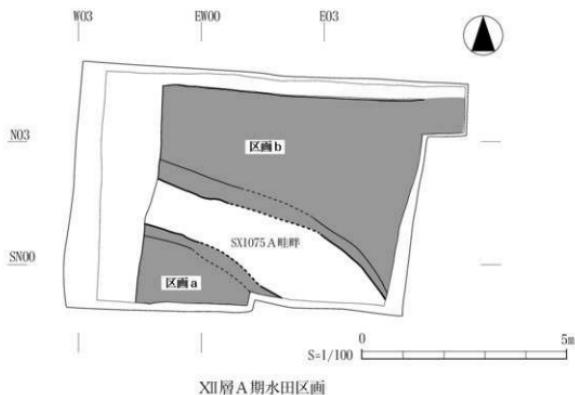
#### XII層水田跡

XII層で、新旧2時期（A→B期）の水田跡を発見した。

XII層A期水田跡：SX1075畦畔、水田区画a・bを確認した。SX1075は北西から南東方向に、やや湾曲しながら延びる畦畔である。長さ6.5mを検出したが、東側に接する第30次調査の成果とあわせると、直線距離で27m以上になる。規模は上幅1.4～2.0m、高さ0.2mであり、粗砂が多量に混入する黒褐色粘質土（10YR3/2）を盛り上げて形成されている。水田区画a・bは、SX1075を境に南北に作られている。規模は、区画bで東西6m以上であることが確認できるものの、調査区の制限上、全体の規模については明らかでない。なお、区画a・b水田面の比高については、区画bが約10cm低く造られている。遺物は、古墳時代の土器片がある。

XII層B期水田跡：A期上面にSX1076畦畔を構築し、さらにSX1075上面を埋め戻し非耕作域にするなどして造り替えた水田跡である。畦畔のほか水田区画c、SX1077水口を確認した。耕作土はA期のもの





第3図 水田区画変遷図

を踏襲しているが、埋土に時期差を示すような明確な違いは確認できなかった。S X1076はA期水田区画b上面に新たに造られた南北方向の畦畔であり、調査区北端部で僅かに確認した。規模は、上幅約1.4m、高さ0.4mであり、砂粒を多く含む褐灰色粘土(10YR4/1)、灰黃褐色粘質土(10YR4/2)、黒褐色粘土(10YR3/2)を下から順に盛り上げて形成している。非耕作域はS X1075畦畔上に造られている。規模は、南北3.8m以上、高さ0.3mであり、上層に褐灰色粘土(10YR4/1)、下層に砂粒を多く含む灰黃褐色粘質土(10YR4/2)を盛り上げて形成している。水田区画cは、S X1076を境に東西に造られている。東西4.5m以上確認したが、調査区が限られていたため区画の規模を明らかにすることはできなかった。S X1077水口は、S X1076と非耕作域との接続付近に設けられている。規模は上幅1.1m、下幅0.2m、深さ0.2~0.24mであり、僅かではあるが西から東に傾斜している。なお、S X1077と東側の区画cとの水田面については、S X1077から区画cに向かって傾斜しており、比高は約15cmである。遺物は、古墳時代の土師器甕がある。

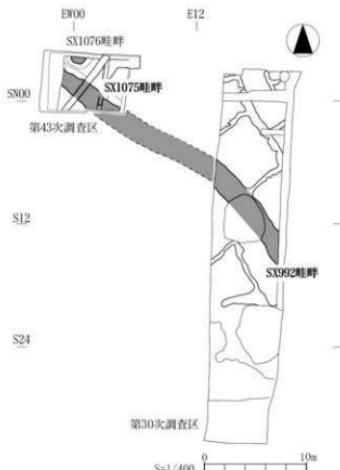
#### VI層上面

##### S D1071溝跡

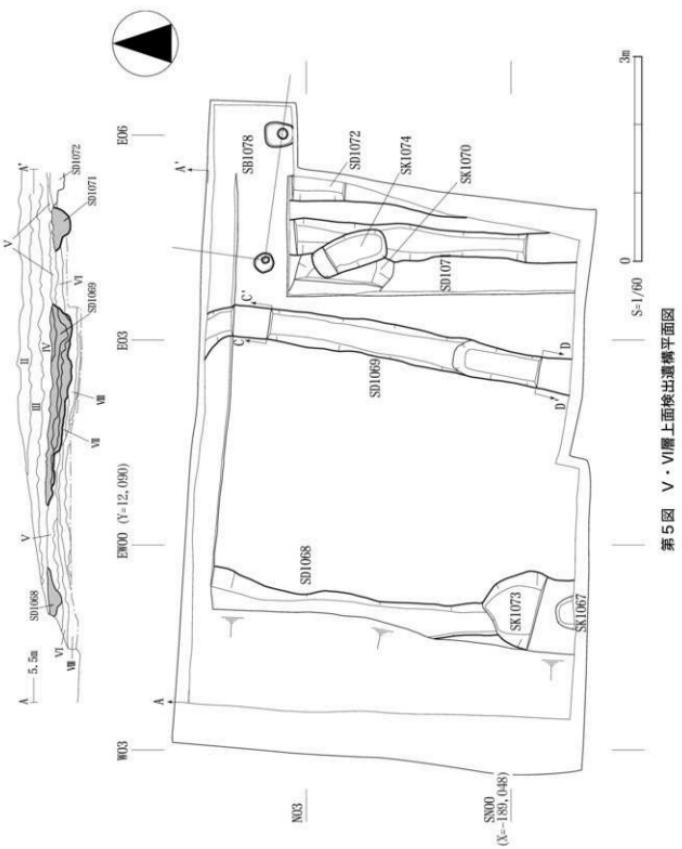
調査区東端部のVI層上面で発見した南北方向の溝跡である。S K1070・1074土壤と重複し、前者より古く、後者より新しい。方向は北で約2度東に偏している。規模は、長さ5.3m以上、上幅0.4~0.5m、下幅0.2~0.3m、深さ0.25mである。断面形は概ねU字状であるが、北半部では西側が緩やかに立ち上がりっている。底面は、北側から南側に向かって緩やかに傾斜しており、比高は10cmである。埋土は、2層に細分することができる。上・下層ともに、灰白色火山灰が二次堆積する褐灰色シルト(10YR4/1)である。遺物は出土していない。

##### S K1074土壤

調査区東端部のVI層上面で発見した南北に長い土壤である。S D1071、S K1070と重複し、それよりも古い。規模は、長軸1.1m、短軸0.5m、深さ0.2mである。壁は緩やかに立ち上がり、底面は概ね平坦である。埋土は黒褐色粘土(10YR3/2)であり、にぶい黄褐色シルト(10YR5/3)がブロック状に多量に混入している。遺物は出土していない。



第4図 S X1075畦畔と第30次調査区



#### V層上面

##### S B1078掘立柱建物跡

調査区北東隅のV層上面で発見した掘立柱建物跡である。柱穴は2基検出したのみであるが、北側に近接する第29次調査区の成果とあわせると、桁行3間、梁行2間の南北棟建物跡である可能性が高い。柱間は、南妻西から1間分で1.86mである。柱穴の規模は、直径30cmの円形のものと、長辺約40cm、短辺35cmの方形のものがあり、柱痕跡は、直径10~15cmである。遺物は出土していない。

##### S D1068溝跡

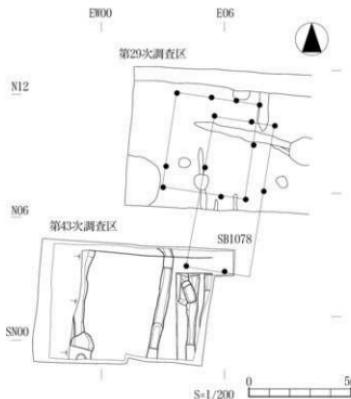
調査区西端部のV層上面で発見した南北方向の溝跡である。南端部でS K1073と接続している。方向は、北で約4度東に偏している。規模は、上幅0.5~0.7m、下幅0.3~0.4m、深さ0.2mである。断面形は皿状であり、壁は緩やかに立ち上がりっている。底面は平坦であり、比高もほとんどない。埋土は、黒褐色シルト(10YR3/2)であり、にぶい黄橙色シルト(10YR6/4)が斑状に混入する。遺物は、土師器杯(B類)の小片がある。

##### S D1069溝跡

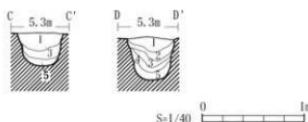
調査区中央部のV層上面で発見した。南北方向の溝跡であるが、北端部で西に屈曲している。方向は、北で約9度東に偏している。規模は、上幅0.45~0.5m、下幅0.3~0.35m、深さは北半部が0.25~0.3m、南半部が0.4mである。断面形はU字状であり、壁は垂直気味に立ち上がりっている。底面は、北側から南側に向かって傾斜しており、南半部で深さ10cmほどの段掘りが行われている。埋土は、北半部で3層、南半部5層確認できるが、色調や土性から北半部の1・2・3層が南半部の1・3・4層に対応する。1層及び3~5層は、いずれも黒褐色粘土(10YR3/1、7.5YR2/1)を主体としており、4層には炭化物が多量に混入している。2層は砂粒が若干混入する褐灰色砂質土(10YR4/1)である。遺物は、無軸陶器壺・片口鉢、かわらけがある。

##### S K1073土壤

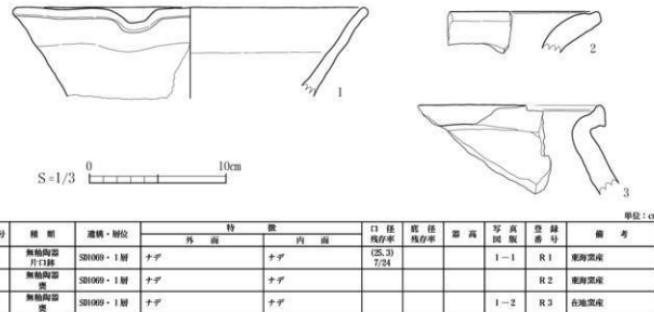
調査区西端部のV層上面で発見した南北に長い土壤である。S K1067と重複し、それよりも古い。また、北端部ではS D1068と接続している。規模は、長軸1.3m以上、短軸1.1m、深さ20mである。壁は緩やかに立ち上がり、底面は概ね平坦である。遺物は、須恵器杯(V類)がある。



第6図 S B1078建物跡と第29次調査区



第7図 S D1069溝跡断面図



第8図 SD1069溝跡出土遺物

### 3.まとめ

今回の調査では、XII層で水田跡、VI層上面で土壤、溝跡、V層上面で土壤、溝跡を発見した。

XII層では新旧2時期の水田跡（A→B期）を発見した。水田区画の形態について見ると、A期では幅1.5～2m前後の大規模な東西方向のS X1075畦畔を境に南北に区画を形成しているが、B期ではS X1075上面に盛土して非耕作域を形成し、その北側に新たに南北方向のS X1076畦畔を構築し、これを境に東西の区画に造り替えている（第3図）。隣接する第30次調査区でも新旧2時期の変遷が確認されていることから、ある時期広範囲な区画の改修が行われている可能性が推測される。水田跡の年代については、第30次調査で出土した遺物より、古墳時代前期のものであることが明らかとなっている。

VI層上面で発見した遺構については、S D1071に10世紀前葉に降下したとされる灰白色火山灰が斑状に混入していることから、それ以降の年代が推測される。その他の遺構については、出土遺物がないことから明らかでない。

V層上面で発見した遺構では、S D1069溝跡から無釉陶器壺・片口鉢が出土している。このうち、壺（第8図3）は、13世紀中葉～後半頃の在地窯産のものであることから、S D1069溝跡については、それ以降の年代が推測される。S B1078建物跡、S D1068溝跡の年代については、検出面がS D1069溝跡と同じIV層上面であることから、S D1069溝跡と近い年代としておきたい。

#### 【参考文献】

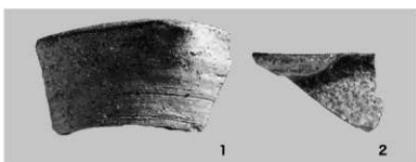
- 田中剛毅「熊刈A窯跡」「中世奥羽の土器・陶磁器」東北中世考古学会編 2003  
 中野晴久「赤羽・中野 生産地における編年について」『中世常滑焼きをおって 資料集』 1994  
 多賀城市理蔵文化財調査センター「多賀城市理蔵文化財調査センター年報」一平成7年度一 1997  
 多賀城市理蔵文化財調査センター「多賀城市理蔵文化財調査センター年報」一平成8年度一 1998



XII層水田跡 西より



VI層上面全景 南東より



1 無釉陶器片口鉢 (第8図1 R1)

2 無釉陶器甕 (第8図3 R3)

写真図版1

## XIV. 山王遺跡第44次調査

### 1. 調査に至る経緯と経過

本調査は、個人住宅建設に伴って実施したものである。当該地は、山王遺跡の南西部に位置し、昭和54年度に実施した第1次調査の南西側に隣接する。第1次調査においては、掘立柱建物跡、井戸跡、溝跡のほか、小柱穴多数を検出した。確認調査のため遺構の年代等の詳細は不明であるが、出土遺物には古代と中世のものがある。

今回の住宅建設工事は、基礎工法に口径5cm、長さ5.5mの細長い鋼管97本を打ち込む、いわゆるパイル工法を採用するため、地下遺構への影響が懸念された。そのため、発掘調査実施の協力を地権者に求め、平成15年9月に承諾書及び依頼書の提出を受けたことから、本発掘調査として実施するに至ったものである。

調査にあたって、事前に対象地内の盛土等の状況を確認したところ、盛土等の厚さは約70cmであった。調査区の掘削に伴う堆土は、敷地内で処理する必要があったことから、堆土量及び隣接住宅への影響を考慮した結果、調査区の設定にあたっては面積を制約せざるをえなかった。

調査は10月9日から開始し、はじめに重機により盛土及び堆積土の除去を行った。その結果、現代の畑の耕作土と考えられる堆積土II層の下で南北方向の大規模な溝跡（S D1082）や柱列（S A1081）等を検出した。S D1082溝跡は、調査区全域の約2/3を占めるもので、掘り下げを行った結果、2時期の変遷を確認した。また、出土遺物から中世に属するものと判断した。その後、これらの検出面であるIV層を掘り下げたところ、V層上面で4条の小規模な溝跡（S D1085～1088）を検出した。これらの掘り下げ、図面作成等を行い、調査は10月31日の重機による埋め戻しをもって終了した。

### 2. 調査成果

#### (1) 基本層序

I 層：現代の盛土。

IIa層：黒褐色シルト（2.5Y3/1）で、層厚は10～18cm。現代の畑の耕作土。

IIb層：黄灰色シルト（2.5Y4/1）で、層厚は約10cm。調査区西側では認められない。現代の畑の耕作土。

III 層：黒褐色シルト（2.5Y3/1）で、S D1082溝跡が埋められた後に、それを覆うように堆積した土層。

層厚は一番深い箇所で約40cm。



第1図 調査区位置図

IV 層：暗灰黄色シルト（2.5Y4/2）で、層厚は10~22cm。中世の遺構検出面。

V 層：にぶい黄色シルト（2.5Y6/3）。古代の遺構検出面。

## （2）発見遺構と遺物

### S A1081柱列

調査区東側のIV層上面で発見した南北方向の柱列である。調査区内では3基の柱穴の検出にとどまるため全容は不明である。性格としては、堀あるいは掘立柱建物の可能性が考えられる。方向は、北で約16度東に偏している。すべてで柱痕跡を確認しており、P2には底面付近に柱材がわずかに残存する。柱間は北から1.22m・1.06mである。各柱穴の平面形はほぼ円形で、規模は掘り方が径20~26cm、柱痕跡が径約10cm、深さは22~38cmである。埋土は、掘り方が黒色シルト、柱痕跡が黒色粘質土である。

### S D1082溝跡

IV層上面で発見した南北方向の溝跡であり、調査区全域の約2/3を占める。調査区内では2時期の変遷（A→B期）が確認できる。

**S D1082A溝跡：**後続するB期とはほぼ同位置にあるため、これによって壊され、底面付近が残存しているだけである。下幅は約1.8m、深さは約0.9mを計る。底面は平坦に近いが、やや凹凸がみられる。埋土は、最下層が黒褐色粘質土で、グライ化した灰オリーブシルトを含んでいる。出土遺物は、すべて前時代の混入品である土師器、須恵器等である。この中には、古代のものだけではなく古墳時代中期の土師器も含まれる。

**S D1082B溝跡：**調査区の西寄りに位置する。S D1083・1084溝跡と重複関係にあり、これらより新しい。方向は、東端ラインでみると北で約10度東に偏している。規模は、西端が調査区外にかかるため正確な数値ではないが、上幅は西壁の立ち上がりから推定して約3.5mである。下幅は1.6~1.8m、深さは約0.7mを計る。また、断面形は緩やかな舟底形を呈する。埋土は、大きく2層に分けられる。上層は黄灰色シルトで、にぶい黄色シルト及び黒褐色シルトをブロック状に多量に含むことから人為的に埋められたものと考えられる。下層は黒褐色粘質土で、植物遺存体をわずかに含んでいる。遺物は、中世のものでは施釉陶器折線小皿（第4図4）、無釉陶器甕（第4図5）、錢貨（元豐通宝 第4図8）が出土している。

### S D1083溝跡

調査区東側のIV層上面で発見した東西方向の溝跡である。S D1082B溝跡と重複関係にあり、これより古い。方向は、東で約10度南に偏している。規模は、上幅45~52cm、下幅28~30cm、深さは調査区東壁の断面観察では22cmである。断面形は舟底形で、底面には凹凸がみられる。埋土は黒褐色シルトの單層で、暗灰黄色シルトをブロック状に含んでいる。遺物は土師器と須恵器が出土しているが、いずれも破片である。

### S D1084溝跡

調査区西端で発見した東西方向の溝跡である。西側は調査区外にさらに延びると推定されるが、東側はS D1082B溝跡に壊されており、調査区内で確認できる長さは約30cmしかない。2時期の変遷（A→B期）があり、新しい時期には北側に位置をずらしている。

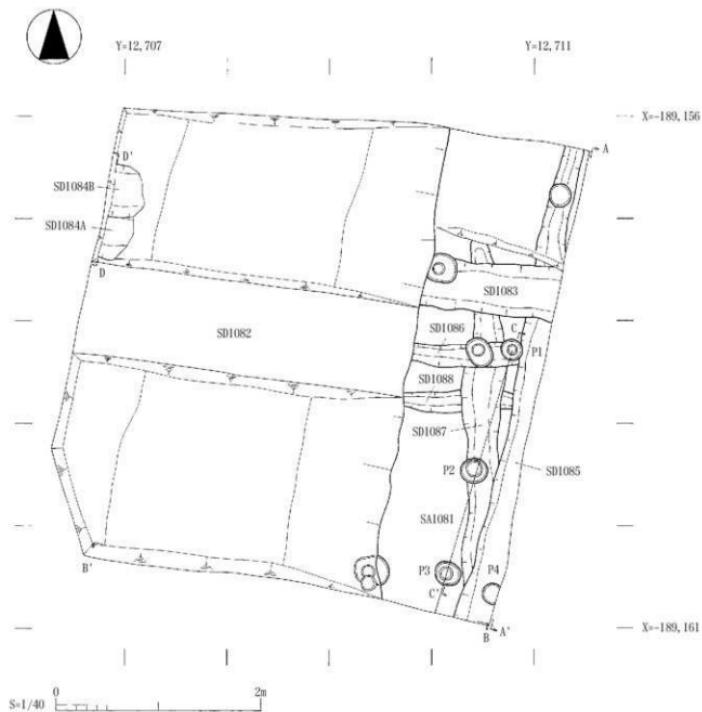
**S D1084A溝跡：**後続するB期に北壁が壊されており、また調査区内ではわずかの範囲しか確認できなかったため、方向等は不明である。規模は、下幅が約40cm、深さは調査区西壁の断面観察では約35cmである。

埋土は黒褐色シルトの単層で、にぶい黄色シルトをブロック状に多量に含むことから、人為的に埋められたものと考えられる。遺物は出土していない。

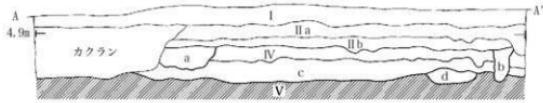
**S D1084B溝跡**：先行するA期に対し、約40cm北側に位置する。規模は、上幅約50cm、下幅約40cmで、深さは調査区西壁の断面観察では約30cmである。埋土は黒褐色シルトの単層で、にぶい黄色シルトをブロック状に多量に含むことから、人為的に埋められたものと考えられる。遺物は出土していない。

#### **S D1085溝跡**

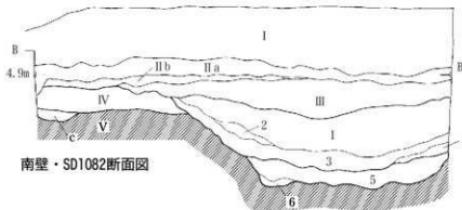
調査区東端のV層上面で発見した南北方向の小溝跡である。調査区北壁から南壁にかけて約4.7m検出



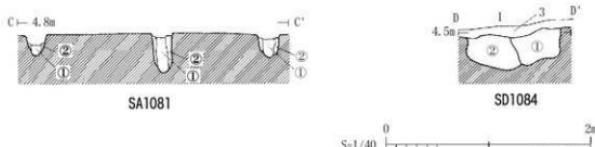
第2図 遺構平面図



東壁断面図



南壁・SD1082断面図



SD1081

SD1084

S=1/40 0 2m

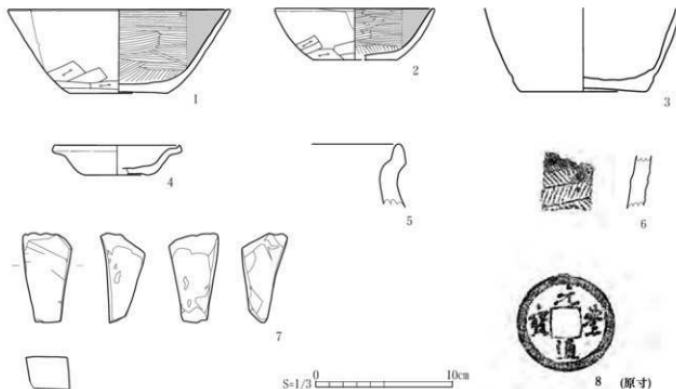
層位	土色・土性	備考	層位	土色・土性	備考
基本層序			SD1083		
I	褐色の透土。		a	黒褐色シルト (2.3V3/1)	褐色黄色シルトをブロック状に含む。
II a	黒褐色シルト (2.3V3/1)	褐色の塊の鉄作土。	P4		
II b	黒褐色シルト (2.3V4/1)	褐色の塊の鉄作土。	b	黒褐色シルト (2.3V3/1)	褐色黄色シルトを小ブロック状に含む。
III	黒褐色シルト (2.3V3/1)	に、ぶい黄色シルトを塊状に若干含む。	c	黄灰色シルト (2.3V4/1)	に、ぶい黄色シルトを塊状に若干含む。
IV	褐色黄色シルト (2.3V4/2)	黒褐色シルトを混入。	d	黄灰色シルト (2.3V4/1)	に、ぶい黄色シルトを小ブロック状に含む。
V	に、ぶい黄色シルト (2.3V6/3)				
SD1082			S A 001		
1	黒褐色シルト (2.3V4/1)	に、ぶい黄色・黒褐色シルトを多く含む。	①	黒色粘質土 (2.3V2/1)	粗粒隕
2	黒褐色砂質土 (2.3V4/1)	に、ぶい黄色・黒褐色シルトを若干含む。	②	黒色シルト (2.3V2/1)	粗大割り方
3	黒褐色粘質土 (2.3V3/1)	細物質含みを若干含む。			
4	黒褐色砂質土 (2.3V4/1)	1～4層は B期埋土。	S D 0084		
5	黒褐色粘質土 (2.3V3/1)	黒オリーブシルトを含む。 A期埋土。	①	黒褐色シルト (2.3V3/1)	に、ぶい黄色シルトを多く含む。 B期埋土。
6	黒褐色シルト (2.3V3/1)	黒灰紺質土を含む。	②	黒褐色シルト (2.3V3/1)	に、ぶい黄色シルトを多く含む。 A期埋土。

第3図 調査区東壁等断面図

した。S D1086溝跡と重複関係にあり、これより新しい。方向は、北で約12度東に偏している。規模は、上幅20~50cm、下幅8~20cm、深さは調査区南壁の断面観察では10cmである。断面形は舟底形を呈する。埋土は黄灰色シルト(2.5Y4/1)の単層で、にぶい黄色シルトを斑状にわずかに含んでいる。遺物は、土師器杯・甕( B類)と須恵器杯・甕が出土しているが、いずれも破片である。

#### S D1086溝跡

調査区東側のV層上面で発見した東西方向の小溝跡である。重複関係から、S D1085溝跡より古く、S D1087溝跡より新しい。方向は、東で約2度北に偏している。規模は、上幅18~24cm、下幅8~12cm、深さは約5cmである。断面形は舟底形を呈する。埋土は黄灰色シルト(2.5Y4/1)の単層で、にぶい黄色シルトを斑状にわずかに含んでいる。遺物は出土していない。



番号	種類	遺物・附位	特徴		口径	底径	高さ	写真	図版	登録番号	備考
			外面	内面							
1	土器部・杯	IV層	ロクロナデ、裏面:回転系切り→手持ちハラケ文	ハラクイガキ→黒色处理	(16.4) 4/24	(7.2) 14/24	6.2	1-1	R 1		
2	土器部・杯	III層	ロクロナデ、裏面:回転系切り→手持ちハラケ文	ハラクイガキ→黒色处理	(11.8) 4/24	(6.2) 9/24	3.8			R 2	
3	土器部・甕	III層	ロクロナデ、裏面:回転系切り	ロクロナデ	—	7.0 24/24	—			R 3	
4	須恵器 折縁小甕	SD1082B II層	ロクロナデ→施釉(灰釉)	ロクロナデ→施釉(灰釉)	(9.3) 4/24	(4.8) 5/24	2.1	1-2	R 4	周:黒座	
5	須恵器 折縁小甕	SD1082B II層	ヨコナデ	ヨコナデ	—	—	—	1-3	R 5	在地遺産	
6	須恵器 甕	II層	ナデ→押印(矢羽羽)	ナデ	—	—	—	1-3	R 6	東海地方産	
7	椎	遺物・附位 瓦 石	SD1082B I層	1-4 R7	8	相 底 質	遺物・附位 瓦 石	写真 図版 登録番号 R8	備考 元遺物(昭和年1078年)		

第4図 出土遺物

#### S D1087溝跡

調査区東側のV層上面で発見した南北方向の小溝跡である。重複関係から、S D1086溝跡より古く、S D1088溝跡より新しい。方向は、発掘基準線にはば一致する。規模は、上幅24~42cm、下幅14~18cm、深さは約5cmである。断面形は舟底形を呈する。埋土は黄灰色シルト(2.5Y4/1)の単層で、にぶい黄色シルトを斑状にわずかに含んでいる。遺物は出土していない。

#### S D1088溝跡

調査区東側のV層上面で発見した東西方向の小溝跡である。S D1087溝跡と重複関係にあり、これより古い。方向は、東で約1度北に偏している。規模は、上幅16~20cm、下幅8~10cm、深さは約5cmである。断面形は舟底形を呈する。埋土は黄灰色シルト(2.5Y4/1)の単層で、にぶい黄色シルトを斑状にわずかに含んでいる。遺物は出土していない。

### 3.まとめ

今回の調査で発見した各構造は、検出面の違いから年代的に大きく2つのグループに分けられる。

IV層上面で検出した溝跡等の構造は、そのあり方や出土遺物からみて中世に属するものと考えられる。特にS D1082溝跡は、直線的に延びる幅約3.5mの大規模な溝跡である。このような中世の溝跡は、近接する山王遺跡八幡地区や新田遺跡寿福寺地区などにおいても発見されている。いずれも屋敷地の周囲を方形に巡るもので、その内部では多数の掘立柱建物跡や井戸跡が検出されている。前者については、三区画の屋敷跡が発見されており、古い時期のものは12世紀後半頃、新しい時期のものはその終末年代が16世紀後半と考えられている。一方、後者については12~16世紀後半まで屋敷が相次いで営まれたことが確認されている。このうち13~14世紀に存続した屋敷跡が、周囲に溝を巡らす屋敷跡の最も古い発見例である。これらのことから、S D1082溝跡についても同様に屋敷地の周囲を巡る溝跡の一部であろうと推定される。なお、年代については中世の遺物が少ないため詳細は不明である。唯一、B期の1層中から施釉陶器折縁小皿(瀬戸窯産)が出土しており、14世紀中葉のものに類似する。しかし破片であり、また1点だけの出土であるため、参考資料にとどめておきたい。

一方、V層上面で検出した構造については、出土遺物から古代に属するものと考えられるが、詳細な年代は不明である。ただし、出土遺物に非ロクロ調整の土師器(A類)がまったく含まれないことから、8世紀代にはさかのばらないと考えられる。

#### 【引用・参考文献】

- 多賀城市「山王遺跡」『多賀城市史』第4巻 考古資料 1991  
多賀城市「上級武士の拠点—館と屋敷」『多賀城市史』第1巻 原始・古代・中世 1997  
多賀城市「新田遺跡発見の武士の屋敷跡」『多賀城市史』第1巻 原始・古代・中世 1997  
財團法人瀬戸市埋蔵文化財センター「古瀬戸編年表」『研究紀要』第5輯 1997



S D1082B 溝跡掘り下げ状況 西より



S D1082B 溝跡掘り下げ状況 北より



S D1082 溝跡断面 北より



調査区東壁土層堆積状況 西より



1



2



3



4



5

- 1 土器器・杯 (第4図1 R 1)  
2 施釉陶器・皿 (第4図4 R 4)  
3 左：無釉陶器・甕 (第4図5 R 5)  
右：無釉陶器・甕 (第4図6 R 6)  
4 砧石 (第4図7 R 7)  
5 錢貨 (第4図8 R 8)

写真図版1

## XV. 新田遺跡第25・26次調査

### 1. 調査に至る経緯と経過

本調査は、宅地造成工事（第25次）及び個人住宅建設（第26次）に伴う発掘調査である。平成15年6月17日、地権者より当該区における宅地造成工事と埋蔵文化財のかかわりについての協議書が提出された。計画では、本地区内に幅4mの東西道路を建設し、3区画分の宅地を造成するものであった。また、6月27日には、このうちの一区画分について、住宅建築と埋蔵文化財のかかわりについての協議書が提出され、基礎工事の際には直径60m、長さ7.0mのコンクリート杭を用いる工法であることが示された。このため、道路部分の調査と住宅部分の調査を継続して行うことと地権者の了解を得、本発掘調査を実施することに決定した。7月上旬に、地権者よりそれぞれ埋蔵文化財包蔵地に係る発掘調査についての依頼を受け、道路部分については、7月23日に地権者と発掘調査に関する委託契約を取り交わした。

調査は、8月18日より開始した。調査区の設定上、26次調査区の表土除去から入ったが、現表土下1mの深さに達した時点で、大量の産業廃棄物が確認された。惡臭が発生したため作業を一時中断し、地権者及び宅地造成の施工者にこれらの撤去を依頼する。遺構面の状況を確認するため撤去の立ち会いを行ったが、予想以上の深さにまで産業廃棄物が及んでおり、特に東端部では現表土から3mの深さにまで達し、さらに東側に広がっていることが確認された。9月4日、調査区内の産業廃棄物の撤去が完了したことから調査を再開するが、壁の崩落が著しく、土納を用いた崩落防止措置を10日まで行う。11日、南端部で確認したSD1695溝跡埋土の掘り込みを開始するとともに、遺構の希薄な中央部より下層遺構の検出作業に取りかかる。12日、実測図作成の基準点を設置し、隨時平面図・断面図の作成を行う。17日、全景写真撮影を行い、26次調査を終了する。18日、25次調査区の表土除去及び遺構埋土の掘り込み、光波測距儀を用いた平面図の作成を行う。同日、両調査区の埋め戻しを行い、一切の調査を終了した。

### 2. 調査成果

#### (1) 基本層序

今回の調査で確認した基本層序は、以下のとおりである。



第1図 調査区位置図

- I層：現代の盛土で、層厚は約1.4m。
- II層：調査区西側で確認した現代の畑耕作土で、層厚は20～30cm。
- III層：東端部で僅かに確認した褐色シルト（10YR4/1）で、層厚は10cm。S D1695Cの検出面。
- IV層：黄灰色粘質土（2.5Y6/1）が多量に混入する黒褐色粘質土（2.5Y3/1）で、層厚は10～20cm。
- V層：黒褐色粘質土（2.5Y3/1）が多量に混入する褐色粘土（10YR6/1）で、層厚は10～20cm。
- VI層：黄灰色粘質土が多量に混入するにぶい黄橙色粘質土（10YR4/3）で、層厚は約5～20cm。古代の遺構検出面。
- VII層：調査区南東部で確認したにぶい黄色砂（2.5Y6/4）で、層厚は10cm。
- VIII層：調査区南東部で確認したオリーブ灰色砂質土（2.5GY6/1）で、層厚は10cm。暗オリーブ褐色粘土が多量に混入する。
- IX層：調査区全域で確認した黒色粘土（10YR1.7/1）で、層厚は10cm。

## （2）発見遺構と遺物

### S D1690溝跡

調査区東半部のIV層上面で発見した東西方向の溝跡である。方向は、東で約7度北に偏している。規模は、長さ7.5m以上、上幅0.15～0.25m、下幅0.05～0.18m、深さ約0.1mである。断面形は皿状であり、壁は緩やかに立ち上がっている。埋土は、褐色粘土（10YR4/1）である。遺物は出土していない。

### S D1696溝跡

調査区西半部のVI層上面で発見した東西方向の溝跡で、西端部でS D1691南北溝と接続する。方向は、東で約11度北に偏している。規模は、長さ6.3m、上幅0.3～0.45m以上である。埋土は、黒褐色粘質土（10YR3/1）であり、炭化物が斑状に混入している。遺物は出土していない。

### S D1691溝跡

調査区西半部のVI層上面で発見した南北方向の溝跡で、西端部でS D1696東西溝と接続する。方向は、概ね発掘基準線と一致する。規模は、長さ1.6m以上、上幅0.6～0.65m、深さ約0.4mである。埋土は、黒褐色粘質土（10YR3/1）であり、炭化物が多量に混入している。遺物は出土していない。

### S D1692溝跡

調査区西半部のVI層上面で発見した南北方向の溝跡である。S D1696と重複し、それよりも新しい。方向は、概ね発掘基準線と一致する。規模は、長さ1.5m以上、上幅0.65～0.85m、深さ0.15mである。埋土は、黒褐色粘質土（10YR3/1）である。遺物は、須恵系土器杯がある。

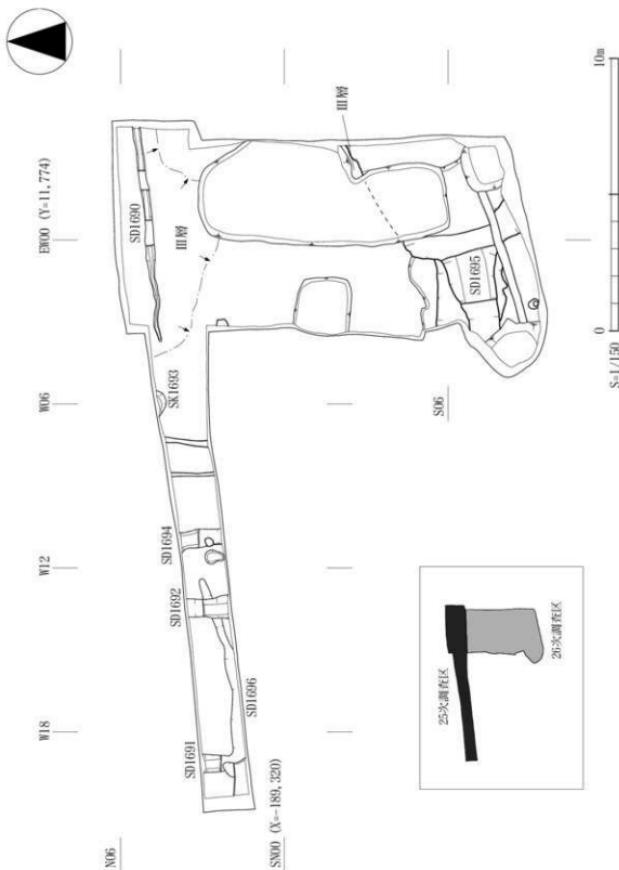
### S D1695溝跡

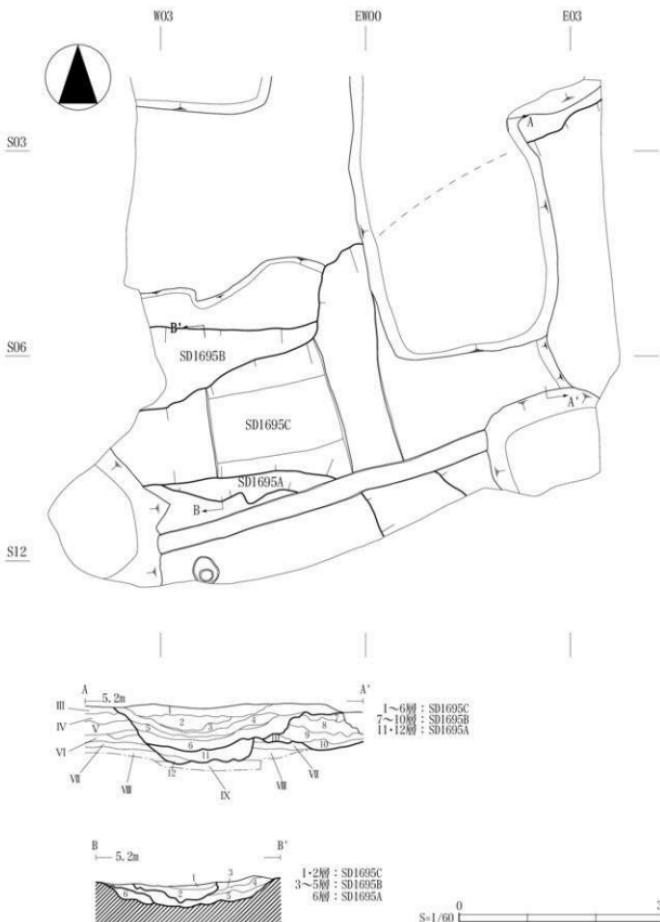
調査区南端部のIII a層上面で発見した東西方向の溝跡である。長さは7m以上あり、3時期の変遷がある（A→C期）。

**S D1695 A溝跡：**東端及び西端部のC期下層で、僅かに確認したのみである。規模は、上幅約1.6m、深さ0.3～0.4mである。断面形は概ねU字状であり、壁は南側がやや急に立ち上がっている。埋土は、2層に細分することができる。上層がオリーブ黒色粘土（7.5Y3/1）、下層が緑灰色砂質土（7.5GY6/1）である。遺物は出土していない。

**S D1695 B溝跡：**A期より南側に造られている。方向は、概ね発掘基準線と一致する。規模は、上幅約

第2図 運構平面図





第3図 SD1695溝跡平面図・断面図

2.5m、下幅1.2～1.4m、深さ0.45～0.5mである。断面形は概ねU字状であり、壁は緩やかに立ち上がっている。埋土は、東端部で4層に細分することができる。いずれも暗緑灰色（7.5GY4/1）やオリーブ黒色粘土（7.5Y3/1）が主体であり、このうち上から2層目が人為的に埋め戻されていることを確認した。遺物は、天目茶碗の小片がある。

**S D1695C溝跡**：B期より北側に造られている。方向は、東で約31度北に偏している。規模は、調査区中央部を境に極端な違いがある。西側は上幅1.1～2m、下幅0.9～1m、深さ0.2～0.3mであるのに対し、東側は上幅3.5m以上、下幅約2m、深さ0.6mと2倍の規模である。断面形はやや上方が開いたU字状であり、壁は緩やかに立ち上がっている。埋土は、東端部で6層に細分することができる。黒褐色粘質土（10YR3/2）や灰黃褐色粘質土（10YR6/2）などの自然堆積層であり、上層に砂粒や炭化物が僅かに混入している。遺物は、施釉陶器鉢皿の小片がある。

### 3.まとめ

今回の調査では、VI層上面で小溝跡や土壤、III層上面で溝跡を発見した。

このうちS D1695では、中世の天目茶碗や施釉陶器鉢皿が出土していることから、遺構の年代も概ね中世の範疇で捉えることができる。また、本地区はこれまでの調査成果から、新田遺跡寿福寺地区の屋敷群を大規模に区画する15～16世紀頃の溝跡の南辺付近に位置していることから（第1図）、今回発見したS D1695については、その溝跡の一部である可能性が考えられよう。

V層上面で発見した遺構については、S D1692から須恵系土器杯、S K1693からロクロ調整の土師器杯が出土している。中世の遺物が全く含まれないことから、S K1693は9世紀以降、S D1692は10世紀以降の古代としておきたい。



S D1695溝跡 西より

写真図版1

## 報告書抄録

ふりがな	たがじょうしないのいせき						
書名	多賀城市内の遺跡Ⅰ						
副書名	平成15年度発掘調査報告書						
シリーズ名	多賀城市文化財調査報告書						
シリーズ番号	第77集						
編著者名	石川俊英・鳥田敬・相澤清利・武田健市・村松稔						
編集機関	多賀城市埋蔵文化財調査センター						
所在地	〒985-0873 宮城県多賀城市中央二丁目27番1号 TEL 022-368-0134						
発行年月日	西暦2005年3月10日						
所収遺跡	所在地	コ一ド	北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
市町村 遺跡番号	市町村 遺跡番号						
八幡館跡 第1次調査 384-1	多賀城市 八幡二丁目 384-1	042099	18021	38度 17分 04秒	141度 00分 22秒	20m <sup>2</sup>	個人住宅建設
八幡館跡 第2次調査 341-1	多賀城市 八幡二丁目 341-1	042099	18021	38度 17分 03秒	141度 00分 22秒	120m <sup>2</sup>	個人住宅建設
西原遺跡 第2次調査 244-12	多賀城市 大代一丁目 244-12	042099	18026	38度 17分 13秒	141度 02分 02秒	8.5m <sup>2</sup>	個人住宅建設
西原遺跡 第11次調査 53-3	多賀城市 浮島字西沢 53-3	042099	18017	38度 18分 17秒	140度 59分 55秒	10m <sup>2</sup>	個人住宅建設
高崎遺跡 第41次調査 102-2	多賀城市 高崎二丁目 102-2	042099	18018	38度 17分 28秒	140度 59分 46秒	11.5m <sup>2</sup>	個人住宅建設
市川橋遺跡 第39次調査	多賀城市 市川字鴻ノ池地内	042099	18008	38度 17分 28秒	140度 59分 46秒	40m <sup>2</sup>	個人住宅建設
市川橋遺跡 第40次調査	多賀城市 市川字鴻ノ池地内	042099	18008	38度 17分 40秒	140度 59分 31秒	25m <sup>2</sup>	個人住宅建設
市川橋遺跡 第41次調査	多賀城市 市川字鴻ノ池地内	042099	18008	38度 17分 34秒	140度 59分 35秒	45m <sup>2</sup>	個人住宅建設
市川橋遺跡 第43次調査	多賀城市 市川字鴻ノ池地内	042099	18008	38度 17分 38秒	140度 59分 33秒	45m <sup>2</sup>	個人住宅建設
山王遺跡 第41次調査	多賀城市 山王子東町 浦80-8	042099	18013	38度 17分 49秒	140度 58分 49秒	33m <sup>2</sup>	個人住宅建設

山王遺跡 第42次調査	多賀城市 南宮字町93	042099	18013	38度 17分 54秒	140度 58分 25秒	2003.08.25 ~ 2003.09.12	55m <sup>f</sup>	個人住宅建設
山王遺跡 第43次調査	多賀城市 王子西町浦 42-7	042099	18013	38度 17分 47秒	140度 58分 18秒	2003.10.06 ~ 2003.10.24	40m <sup>f</sup>	個人住宅建設
山王遺跡 第44次調査	多賀城市 王子中山 王1-6	042099	18013	38度 17分 44秒	140度 58分 43秒	2003.10.09 ~ 2003.10.31	20m <sup>f</sup>	個人住宅建設
新田遺跡 第25次調査	多賀城市 新田字北31 -1	042099	18012	38度 17分 39秒	140度 58分 04秒	2003.08.18 ~ 2003.09.24	57m <sup>f</sup>	宅地造成
新田遺跡 第26次調査	多賀城市 新田字北31 -1	042099	18012	38度 17分 39秒	140度 58分 04秒	2003.08.21 ~ 2003.09.24	90m <sup>f</sup>	個人住宅建設
所収遺跡	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物		特記事項		
八幡館跡 第1次調査	城 館 散布地	古代・中世	溝・竪穴住居・ 柱穴土壙	土師器 かわらけ				中世城館に伴 う空掘か
八幡館跡 第2次調査	城 館 散布地	古代・中世	溝・竪穴住居・柱穴	土師器・須恵器 中世陶器				
西原遺跡 第2次調査	散布地	古代	溝・柱穴	なし				
西沢遺跡 第11次調査	集落	古代・中世	柱穴・土壤	土師器・須恵器				
高崎遺跡 第41次調査	集落	古代・中世・ 近世	溝・土壤	須恵器				
市川橋遺跡 第39次調査	集落 都市	古墳時代・ 古代	なし	なし				
市川橋遺跡 第40次調査	集落 都市	古墳時代・ 古代	河川	土師器・須恵器 円面鏡				
市川橋遺跡 第41次調査	集落 都市	古墳時代・ 古代	溝・土壤・河川	土師器・須恵器				
市川橋遺跡 第43次調査	集落 都市	古墳時代・ 古代	道路	土師器・須恵器 灰釉陶器				方格地溝を形成 する東西道路
山王遺跡 第41次調査	集落 都市	古墳時代・古 代・中世・近世	道路	土師器・須恵器 須恵系土器				方格地溝を形成 する南北道路
山王遺跡 第42次調査	集落 都市	古墳時代・古 代・中世・近世	溝・土壤	陶磁器(近世)				
山王遺跡 第43次調査	集落 都市	古墳時代・古 代・中世・近世	溝・柱穴・水田	土師器・施釉陶 器				古墳時代前期 の水田跡
山王遺跡 第44次調査	集落 都市	古墳時代・古 代・中世・近世	溝・柱穴	土師器・須恵器 中世陶器				
新田遺跡 第25次調査	集落 屋敷	古墳時代・ 古代・中世	溝	須恵系土器				
新田遺跡 第26次調査	集落 屋敷	古墳時代・ 古代・中世	溝	土師器・施釉陶 器	屋敷を区画す る溝			

---

多賀城市文化財調査報告書第77集

多賀城市内の遺跡1

—平成15年度発掘調査報告書—

平成17年3月10日発行

編集 多賀城市埋蔵文化財調査センター

多賀城市中央二丁目27番1号

電話 (022) 368-0134

発行 多賀城市教育委員会

多賀城市中央二丁目1番1号

電話 (022) 368-1141

印刷 今野印刷株式会社

仙台市若林区六丁の目西町2-10

電話 (022) 288-6123

---





